

ロバート・オウエンとニュー・ハーモニー (1)

——ジョージ・ラップとハーモニーについて——

上 田 千 秋

一 はじめに

わが国のロバート・オウエン研究は再び活発化しており、彼の多岐にわたる活動の各局面についての詳細な研究も進んでいるといえようが、特にニュー・ハーモニーにおける活動に焦点をあてた研究業績は極めて少ない。^①

オウエンが、一八二五年一月、アメリカのインディアナ州に三万エーカー(二万二千町歩)の土地を買収し、九百人の参加者を集め、「ニュー・ハーモニー平等村」(New Harmony Community of Equality)を開設したが、その社会主義的実験はわずか二年余りで失敗してしまつたということぐらひは、すくなくともオウエンという名前を知る者にとっては常識になっている。

また多くの社会思想史のテキストでは、村の開設当時のオウエンの抱負や、村の早期破綻の原因を語っているものの、^②彼がニュー・ラ

ナーク(New Lanark)の経営責任を事実上放棄して、ニュー・ハーモニーに巨額の資産と精魂を傾けたのはなぜか?この壮大な実験の具體的経過はどうであつたか?、「全アメリカ人民を熱狂させ、興奮させた最初の社会主義者」のこの実験が、その後のアメリカにいかなる影響を与えたか?などの多くの疑問には答えていない。

わが国において、ニュー・ハーモニーに焦点をあてた研究が進まなかつたこと、またその前提条件ともなるニュー・ハーモニー以前のハーモニー(Harmony, Harmonie)の研究が皆無に近かつたことについては、さしづめ次の三つの影響が考えられる。

①ひとりニュー・ハーモニーのみでなく、すべてのオウエン主義の実験は、最初から、「ユートピアになる運命」をになつていたし、「ブルジョアの博愛心と財布」に依存して築かれた「空中楼阁」であり、「当然失敗するにきまつている小規模な実験」にすぎなかつたと軽視したマルクス、エンゲルスの主張に支配された

こと。『共産党宣言』『反デュリング論』『空想から科学へ—社会主義の発展』

②戦前のわが国のオウエン研究に大きな影響を与えたベヤア

(MarBeer, 1864~1940?)^④が、一八二一年以後のオウエンの活動を、

それまでの彼の見解の繰返しであるとして高く評価しなかったこと。^⑤

③海外とりわけアメリカでの、ニュー・ハーモニー研究が、再び活発化したのは極めて最近になってからであること。^⑥

そこで、ニュー・ハーモニー研究の必要性を痛感している私としては、この三つの影響に対応する、私自身の見解をあらかじめ提示しておかねばならない。

まず第一の影響に対する私見である。

『共産党宣言』から『空想から科学へ—社会主義の発展』にいたるマルクス、エンゲルスの理論展開は、自分たちドイツ社会主義者の学説の科学的正しさを証明する上で、先駆者および同時代の他の者の社会主義思想は、資本主義生産の未熟な状態、未熟な階級状態に対応する未熟な理論であり、未来社会との空想的描写にすぎないと批判した。マルクス主義における科学性の強調は、それ以前の社会主義のみか、それ以後の社会主義のすべてにまで、「非科学的」ないし「空想的」社会主義のレッテルを貼り続けている。ユートピアという用語に、軽侮と非難の意味がこめられ、「今日のユートピアが明日の現実になり得る」可能性までも否定しようとしている。

ユートピア社会主義との対決を通じて構築されたマルクス主義が、

つねに胎内からユートピアを追放し続けることによって科学性をたかめてきた結果、今日では革新思想としての弾力性を失い、權威的教条主義化への危険を濃厚にはらんできているという見方をする者が多い。とくに、マルキストないしはプロ・マルキストのなかからも、たとえば、「歴史の巨大な発展にたいして、思想と理論としてのマルクス主義は大きく立ちおくれ、歴史を先見する変革思想として鮮烈な魅力を失いかけている」といわれているほどである。^⑦

マルクス主義が大衆の「救い」を示す思想としての魅力に乏しいことをいち早く感得し、ウェーバー (Max Weber, 1864~1920) から多くを摂取して、「総合的」にマルクス主義を乗りこえることに使命をかけたマンハイム (Karl Mannheim, 1893~1947) における「ユートピア的なものの必要不可決であることの発見」は、ニュー・ハーモニー研究の意義づけに十分であると考えられる。

「ユートピア的なものの完全な消滅は全体としての人間生成の形を変えさせてしまうであろう。ユートピアの消滅は、人間自身が物になってしまいうような、静止した即物性の状態を引き起こす。このようにして次のような考え得るかぎりの最大の逆説が起こってくるにちがいない。すなわち、ものごとをもっとも合理的に支配できる人間が、たんなる衝動の被造物になるということ、および長い間の忍苦に充ちた英雄的な発展のあとで、意識の最高の段階に達した人間が——この時すでに歴史は盲目の運命ではなく、人間自身の創造物になっているが、——ユートピアのさまざまな形態を放棄するにつれて、歴史を作ろうとする意志を失い、それとともに歴史を洞察す

る力をなくしてしまう、という逆説が起こってくるだろう。」^⑧

第二に、ベエヤアの軽視についてである。

彼はその名著として有名な『イギリス社会主義史』では次のように述べている。

「一八一二年から二一年にかけて、オウエンはその精神的能力の最盛期にあった。その後の四〇年間に於ける、すなわち一八二一年から一八五八年死にいたるまでの彼の活動は、一九世紀二〇年代には到達していた彼の見解の反覆と宣伝であるか、またはその見解実践の試みであった。」^⑨

もちろんマルクス主義者であり、とりわけエンゲルスの弟子でもあったベエヤアも、オウエンが一八二〇年までに社会主義者となったことを認めている。だが彼のオウエン主義理解は、師父の理解度をこえるものではなかったから、その後の彼の大著『社会思想史』では、ヒルキットの『アメリカ社会主義史』を参考にしながらもニュー・ハーモニーの説明を省略して次のように述べているだけである。

「彼は労働大衆の当時の未発達状態のためにその階級闘争と解放とを信じなかったがゆえに、また闘争によってではなくて、啓蒙と平和的な境遇の変化とによって救済しうる、という彼の全自由思想家の見解の結果として、彼はユートピア説に陥り、そして唯一の救済は共產主義的植民地の建設にあると見た。一八二〇年彼は実業生活から退いて、一つはアメリカに、一つはイギリスに共產主義的植民地を建設したが、それらはすべて失敗に終り、そして一八二四年以来階級闘争に入った本来の労働者運動から遠ざかった。」^⑩

ユートピア的なものが無価値で虚妄とみる立場にたつ限り、一八二一年以後のオウエンの活動を軽視するのは当然である。だが、ユートピア思想を過去の思想としてではなく、未来についての理想主義的思想として、マムフォード (Lewis Mumford) の説く「逃避のユートピア」ではなく、「再建のユートピア」を構想するとき、ユートピアは再び歴史形成の主體的起動力としてよみがえる。このユートピア思想は、ウェバーにおける宗教意識でもある。^⑪

「かつてマルクス主義が、圧迫された階級にとってひとつの救いであり、砂漠の中のアアシスであったとすれば、そのアアシスは、マルクス主義の科学だけではなくて、科学のなかに浸透しているユートピアではなかったか」^⑫という問いかけは、再建のユートピアを構想する者にとって大きな示唆を与えている。

すなわち、未来への不安におののく大衆に、救いをさしめす思想として、ユートピアが宇宙砂漠のアアシスとなり得るためには、再建のユートピアは、その理念のなかに、科学的な現実認識の浸透とその反映を認めなければならないということである。

「ユートピアとは、人間と社会の未来的進行方向についての総体的な見取り図であり、理性と情念のトータルな投入によって生み出される現実超越的、未来志向的な社会の青写真である」^⑬という定義的表現をほぼ全面的に承認する者にとって、しかも再建のユートピアに科学的現実認識の浸透の不可欠性を認める者にとっては、「オウエンの真骨頂は、かれが宗教上の理由からニュー・ラナーク工場を追われた一八二四年以降に発揮される」^⑭と考えるのは当然である。

したがって、私は、ニュー・ハーモニー研究は、人類の福祉を模索する上で極めて重要な意義をもつと考える。

第三に、アメリカにおけるニュー・ハーモニー研究の活発化についてである。

アメリカにおける共産村は、一六八〇年にラバディスト (Labadists) とよばれたプロテスタントの神秘主義者が、北部メリーランド (northern Maryland) に築いたものが最初とされている。¹⁵⁾ したがってアメリカの共産社会の歴史は、ほぼ三〇〇年にわたることになるが、カンター女史 (Rossabeth Moss Kanter) によれば、この間における最も盛んな共産社会建設ブームの時期は、一八四〇年代が最初で、一九六〇年代の終りから七〇年代にかけて、再びブームが訪れたという。彼女は、アメリカの共産社会を、① religious, ② politicoeconomic critiques, ③ Psychosocial critiques の三つの類型に分けており、現代の共同体 (Communes, Communities) の試みは、そのすべてにわたってはいるが、多数を占めているのは psychosocial なものであると述べている。¹⁶⁾

またリグビー (Andrew Rigby) はコミュニオン (Communes) を、次の六種に類型化する。¹⁷⁾

- ① Self-actualising Communes
- ② Communes for Mutual Support
- ③ Activist Communes
- ④ Practical Communes
- ⑤ Therapeutic Communes

⑥ Religious Communes

彼は「コミュニオン」という用語に与えた従来の社会科学者の定義が何れも実態に即していないとして、すくなくとも「人間の集団が、共同生活を営み、彼らがその生活様式をコミュニオンと認めている限り」それを是認し、現在地球上に存在するコミュニオンの確実な数的把握は実際には困難だが、「一九七〇年現在のアメリカには、都市のコミュニオンを除き各種の農村コミュニオンが二万以上存在する。日本には恐らく約五〇のコミュニオンと約三〇〇の協同村 (co-operative villages) がある。イスラエルのキブツ運動 (Kibutz movement) はいまなお増加の一途をたどっており、二三五以上のキブツが合計九万人を収容しているが、この人口はイスラエルのユダヤ系人口の約四％に相当する。：より現実的な推計では、イギリスのコミュニオン数は、一九七二年におよそ一〇〇あるものとみられる」と述べている。¹⁸⁾

キブツはもちろん例外として、工業化社会に増加しつつある各国のコミュニオンは、主として三〇歳以下の若者が構成する社会であることは特徴的である。すべてのコミュニオンは、すくなくとも、現存社会秩序を擁護する原理や支配的原則が、人間の本性を否定しているという認識においては共通している。したがって現在のコミュニオンの大多数が、Psychosocial critiques の集団であり、Self-actualizing communes であつたとしても、消極的反体制的であるといえようが、豊かな物質社会の中で、失われた帰属感や満たし得ぬ自己確立の欲求をコミュニオンに求めつつある彼らの行動は、現代社会への警告にもなっている。

現代のコミュニケーションは、人間存在の意味を改めて、人間と自然との結びつきの中で確認しようとする欲求をもつ者同志の共同体験であり、与えられている社会、文化、経済などの制限の絆からどこまで脱出が可能かを模索する試みである。目下のところ、彼らの大多数は多種多様な価値体系の中を放浪中であり、未だ独自の精練された価値原理を築き上げるには至っていないといえる。

「私たちは望みうるすべてのものを持っているのに、どうして不幸で、孤独で、不安なのか。私たちの生活様式に、私たちの社会構造あるいは価値体系に、何かまちがったところがあるのだろうか。ほかにもっといい道があるのだろうか。」^⑭という疑問が、意識すると、しないとかかわらず、大多数の人間、特に豊かな社会のあらゆる消費に満腹しながらも、生命には飢えている若い世代に強い。そしてこの疑問が彼らのユートピア、コミュニケーション志向と結びついているとすれば、若者に社会変革の可能性の根拠を把握させる可能性は残されている。

注目すべきは、アメリカの若者に、とりわけコミュニケーションを志向する者に、ロバート・オウエンと彼の思想が新しい魅力となっていることを教えてくれるエピソードである。

一九七一年五月一五、一六の両日、インディアナ州ニュー・ハーモニーにおいて、オウエン生誕二〇〇年記念会議が開催された。一六日の午後、『アメリカの思想に与えたロバート・オウエンの影響』(Robert Owen's Impact on American Thought)をテーマに、ハリソン(John F.C. Harrison)・ギンズバーグ(Robert Ginsberg)ら四名によるパネル討論が行われた。

ロバート・オウエンとニュー・ハーモニー (1)

その際、「現在のコミュニケーション及びこの種の事柄に関心をもつ若者に対して、オウエンなり彼のアイデアがどんな影響を与えていると思いますか」というアルント(Karl J. Arndt)の質問に対して、二人の研究者は次のように述べている。

カーティ(Marie Curti)：「私はこの質問を、コミュニケーションのメンバーであった数名の若者にぶつけてみました。端的に申して、彼らはロバート・オウエンについては何も知りませんでした。そこで彼らにオウエンの話を少しばかり語ってみたところ、彼らは非常に興味を持ちはじめ、もっと知りたいといえますので、オウエンに関する入門的な図書を教えてやりました。私の見るところでは、コミュニケーションに関心をもつ現代の若者の考え方には、知的に大きな相違があります。つまり現代文明に反発する青年はいかにも多いのですが、彼らのコミュニケーションへの関心はおおむね幼稚で、非科学的である点が、オウエンの科学的貢献と極端に対照的です。オウエンは科学を理解し、科学の限界も良く理解していましたし、新社会へ向けての科学の利用方法をこころえていました。」

ギンズバーグ：「政治哲学の講義でたまたまカル・マルクスの本を学生と読んでいたところ、何度かロバート・オウエンのことが出て来ました。学生達が、このロバート・オウエンとはどんな人物なのか、彼はどんな主張をしたのですか?と聞くものですが、彼は協同社会に関する理論家の一人で、暴力を否定した人です」と答えたところ、彼について学習しようという希望が多かったものですから、オーケー、じゃあしばらくやりましょう」と答え

て二週間ばかりやってみました。ところがその頃になると、教室に入ってくる学生が半分に減ってしまったので、どうしたのか、彼らはオウエンの社会理論に失望してしまったのか、残りの学生に聞いてみました。彼らの答はこうです。「ノー、彼らはコミュニンで生きるために出かけてしまったのです」²⁰。

若い世代を中心にしたユートピア志向、コミュニン志向の高まりに比例するかのうちに、アメリカでのユートピア、コミュニティ、とりわけロバート・オウエンに關係する研究書の刊行、古典的文献の復刻が盛んになってきていることは特記しておいて良い。

本節末尾の表は、オウエンとニュー・ハーモニイを研究する上で直接参考となる今世紀初頭までの主要文献の復刻状況及び、最近の重要なオウエン研究書を含めた、戦後の研究書の再版状況であるが、その殆んどはすべてアメリカで出版されている。また、オウエンのおびただしい著作の主なものも、同様にアメリカで復刻されており、特に彼が一八二五年二月二五日と三月七日の二回にわたって、ワシントンの国会議事堂で、大統領、各大臣その他の前で行った講演は、ニュー・ハーモニイの開村に先立って、始めて彼自ら、その性格形成論とその実践方法を全アメリカによびかけたものであるが、一九七〇年、アメリカ・マルクス主義研究所(AIMS)の史料第六集として、解説を付して復刻されたことは興味深いものといえる。²¹

私はこれらの文献を足がかりに、次節からニュー・ハーモニイの舞台装置としてのハーモニイの骨組をながめ、その上でニュー・ハーモニイの歴史をふりかえり、再建のユートピアを構想しつつ、社会福祉

の旅の道標を立てていく作業を開始することにする。

- ① ニュー・ハーモニイに重点を置いた研究書は、わが国では未だ生れていない。ニュー・ハーモニイを特にとりあげた文献として、筆者が参考にし得たのは、

園 乾治「ニュー・ラナークとニュー・ハーモニイ」『社会事業』第十二巻第八号、昭和三年一月。

越村信三郎「アメリカにおけるキリスト教共同体—ニュー・ハーモニイ物語のひとつま」『関東学院大学経済学会研究論集経済系』第六一号、昭和三年七月。越村信三郎「ロバート・オウエンの夢と現実—ニュー・ハーモニイ物語のひとつま」『ロバート・オウエン論集』ロバート・オウエン研究会編、昭和四十六年五月のみである。

- ② ニュー・ハーモニイについて語っている代表的な社会思想史のテキストとしては、大河内一男『社会思想史』昭和二年、有斐閣（二七九—二八二頁）、住谷悦治『社会思想史』昭和三年、ミネルヴァ書房、（一一八一—一九頁）、城塚登『近代社会思想史』昭和三年、（二四五—二四七頁）をあげることができる。

- ③ John Humphrey Noyes, *History of American Socialisms*, 1870, p.30
ベエヤは一九四〇年代のはじめにロンドンで死去したという説と、そのころソビエトに移って帰化したという説の両方がある。

- ④ 「一八二一年から一八五八年死にいたるまでのかれの活動は、一九世紀の二〇年代には到達していた見解の反覆と宣伝であるか、その見解を実践しようとする試みであった」とベエヤは述べている。

Max Beer, *A History of British Socialism*, 1919, p.180

- ⑤ 最近一〇年間のアメリカにおける共同社会史の研究は目をみはるものがあり、従ってニュー・ハーモニイの研究の復活は、この国の共同社会史研究の一環として把握する必要がある。研究の動向及び文献については、アメリカ図書館協会の雑誌 CHOICE, June 1973, Vol. 10-No. 4 に掲載された Robert S. Fogarty, *Communal History in America*, p.p.

578-590 が有益な解説である。

- ⑦ 井汲卓一「長州一二編『講座マルクス主義』日本評論社」刊行のことば」
⑧ Karl Mannheim, *Ideology and Utopia: An Introduction to the Sociology of Knowledge with a Preface by Louis Wirth*, London, 1972, p.256 鈴木二郎訳『イデオロギーとユートピア』未来社、一九七八年、二八二ページ。

- ⑨ Max Beer, *A History of British Socialism*, London, 1923, p.180
大島清訳『イギリス社会主義史(一)』(岩波文庫)一九七〇年、三六三ページ。

- ⑩ Max Beer, *Allgemeine Geschichte des Sozialismus und Sozialen Kämpfe, sechste durchgesehene und erweiterte Auflage*, Berlin, 1929 西雅雄訳『社会思想史』一九五一年、四三九ページ。
ベイヤは本書において、アメリカにおける宗教的・共産主義的植民地の紹介を行っており、更にヒルキットの『アメリカ社会主義史』

- (Morris Hillquit, *History of Socialism in the United States*, New York, 1903 読書Geschichte des Sozialismus in America, Stuttgart (Dietz-Verlag), 1906) を参考にせよと述べている。本書は科学的社会主義者の描いた最初の『アメリカ社会主義史』であり、ヒルキットはオウエン及びその実験について一章をあてている(第一部第二章、一九一〇年増訂版では、四八―六七ページ)。しかし「ハーモニイ」の紹介を行なったベイヤが「ニー・ハーモニイ」について言及しているのは客観性を欠くといえるようがない。

- ⑪ ウェーバーの「宗教意識」について大塚久雄氏の解説は次のとおりである。「人間、とりわけ大衆は、科学的に正しいからというだけで動いたりするものではない。むしろ、現在の困窮状態は何故に作り出されたか、われわれはどうすればそれから逃れ出ることができるのか、そういった「救い」をさしめす思想——ウェーバーはそれをひろく「宗教意識」というのですが——によってそのヴィジョンを与えられたとき、はじめて動くものだというわけなのです。……大衆にその現実の利害状況

ロバート・オウエンとニュー・ハーモニイ (1)

にもとづいて行動のヴィジョンを抱かせようという思想——宗教的理念——こそが歴史のダイナミックスの根底を形づくることになるのだ、というわけなのであります。』『社会科学の方法——ウェーバーとマルクス——』(岩波新書)八九一九〇ページ。

- ⑫ 坂本慶一『マルクス主義とユートピア』一九七〇、八一九ページ。
⑬ 伊達功『ユートピア思想と現代』一九七一年、三八ページ。
⑭ ロバート・リーフマン、大宅壮一訳『共産部落の研究』一九二七年、一六ページ。Rosabeth Moss Kanter, *Commitment and Community, Communes and Utopias in Sociological Perspective*, 1972, p.3.

- ⑯ Ibid, p. 7.

- ⑰ Andrew Rigby, *Communes in Britain*, R.K. P., 1974, p. 5.

- ⑱ Ibid, p.p. 3~4.

カンターもリグビーも用語としての commune と community の概念上の相違についての確な説明を与えてはいるわけだが、二つの用語をほぼ同義に使用している。

- ⑲ Erich Fromm, *The Revolution of Hope, Toward a Humanized Technology*, 1968.

作田啓一、佐野啓一郎訳『希望の革命(改訂版)』一九七〇年、二二六ページ。

- ⑳ Robert Owen's American Legacy, *Proceedings of the Robert Owen Bicentennial Conference*, 1972, p.p. 79-80.

- ㉑ Oakley C. Johnson, *Owen in the United States*, AIMS Historical Series No.6, 1970, p.p. 19-64.

著者	書名	初版刊行年	最近重版年
BROWN, Paul.	Twelve months in New Harmony.	1827	1973
OWEN, Robert.	The Life of Robert Owen, Vol I.	1857	1967
..... Vol I A.	1858	1967
SARGANT, W. M.	Robert Owen and His Social Philosophy.	1860	1971
WILLIAMS, Aaron	The Harmony Society at Economy, Penn'a.	1866	1971
NOYES, John H.	History of American Socialisms.	1870	1966
NORDHOFF, Charles.	The Communitistic Societies of the U.S.	1875	1966
OWEN, Robert Dale.	Threading My Way.	1874	1967
JONES, Lloyd.	The Life, Times, and Labours of Robert Owen.	1890	1971
LOCKWOOD, George B.	The New Harmony Movement.	1905	1971
HILLQUIT, Morris.	History of Socialism in the United States.	1908	1971
PODMORE, Frank.	Robert Owen; a biography.	1906	1968
CULLEN, Alexander.	Adventures in Socialism.	1910	1972
WOOSTER, Ernest.	Communities of the Past and Present.	1924	1971
JOHNSON, D. C.	Pioneers of Reform.	1929	1968
DUSS, John.	The Harmonists, a personal history.	1943	1973
COLE, G.D.H.	The Life of Robert Owen.	1925	1965
YOUNG, Marguerite.	Angel in the Forest.	1945	1966
HOLLOWAY, Mark,	Heavens on Earth.	1951	1966
BESTOR, Arthur.	Backwoods Utopias.	1950	1970
COLE, Margaret.	Robert Owen of New Lanark.	1953	1969
WILSON, William E.	The Angel and the Serpent.	1964	1975
ARNDT, Karl J. R.	George Rapp's Harmony Society, 1785-1847.	1965	
.....	George Rapp's successors and material heirs.	1972	

二 ジョージ・ラップとハーモニー

——ベエヤアとポドモアの説明——

私はオウエンの家系と宗教的性格について述べた前稿において、その人格の包括的理解を求める上での出発点を、ベエヤアの描いたオウエン像に求めた。したがって、前節において、彼は一八二一年以後のオウエンの活動を高く評価しなかったと述べたものの、彼のニュー・ハーモニーに関する説明は、どんなものであったかをまず覗く作業から始めていこう。

「一八一五年以降オウエンが受けた失望と敗北とは、かれを実業界から隠退させ、イギリスからアメリカへ渡らせてしまった。かれは、そこで独立宣言の精神に培われた自由民を見いだし、共産社会(community)を建設しようと考えた。一八二四年、かれは計画を実行した。すなわち、インディアナ州における「ハーモニー」とよばれたラピスト共産社会(the Rappist community)に注意をむけたのは、ある旅行者の報告書——それはのちになって、スペンス主義者であるエバンスによって、その著「キリスト教的政策」(Christian Policy, 1818)のうちに再録されたものと、リカードにあてた第三の書簡の終りに「オーエン氏の提案になる諸方策」(Mr. Owen's Proposed Arrangements, 1819)という著書の、匿名の著者によって再録された——によるものであった。ドイツからきた粗朴で宗教心に厚い百姓のラピストは、一八一四年に三万エーカーほどの耕地と荒地

とを買入れ、それを数年のうちにかれらは、盛大な共産主義移住地に変えた。そこへオーエンが赴いていったのである。そのとき、理想主義者や冒険家や職人などさまざまな人が九百人ばかり、かれにしたがった。だが、そのうち少数の人だけが、努力をつづけ、真の開拓精神をもって、この事業にしたがったのである。三年間、たくさんの方の摩擦やいろいろの制度の試みのはて、共産主義の実験は、ついに無惨な失敗に終わってしまった。オーエンは莫大な金を失い、ついにイギリスへ帰った。」

ベエヤアの『イギリス社会主義史』は、中世末から一九三一年までのこの国の社会主義思想の歴史を解明した代表的著作であるとされている。彼は本書で「十九世紀前半におけるイギリス社会主義の中心的存在(The central figure of British Socialism)はロバート・オウエンであると断定し、オウエンの生涯及びオウエン主義の影響については、全記述量の一割以上をあてた説明を行なっている。だが、ニュー・ハーモニーの実験に関する記述は、冒頭にあげたように極めて簡単なものであり、「社会主義者として更生し」、労働者に、「本質的な協同社会主義(co-operative socialism)を説いた」オウエンの意図や実験の経過が説明されていない。

だが、ベエヤアの短かい説明の中からでも、われわれは、①ニュー・ハーモニーは、未開の荒野を開拓して建設されたのではなく、勤勉なドイツ人移住者が整備したハーモニーをそっくり購入して、その上に実験を重ねられたものであること。②しかもオウエンはアメリカに渡る以前に、ラピスト共産村の動きをある程度承知していたことを知

ることができる。

では、オウエンに関して最も忠実な伝記作者とされているポドモア (Frank Podmore) は、ハーモニイの状況、その創設者の人となり、そしてオウエンの購入の経過をどう説明しているかを次に見ておくことにしよう。^④

「ジョージ・ラップ (George Rapp) は、一七五七年、ウュルテンブルグのイプチンゲン (Ippingen in Württemberg) に生れた小農民であつた。若い頃の彼は、生れ故郷の教会で日常行われているような、生気のない形式主義宗教に強い反発を抱くようになったが、その彼に次第に周囲の者が接近し、精神的指導を受けようとする信者の群が形成されていった。当然これに対する迫害も強まってきたので、ラップは一八〇三年、信者達を宗教的自由のある土地へ導くことを決意した。彼はその年、二、三人の仲間だけを連れてまずアメリカに渡り、ピッツバーグの近くに五千エーカーの未開地を購入した。翌年、一六〇〇人の信者が彼に加わり、ハーモニイ社団 (Harmony Society) が結成されたのである。

この小さな村を構成した敬虔なドイツ農民は、全員、正直で、質素で、勤勉であつたから、村はまたたく間に繁栄し、数年後には工場、作業場、皮なめし場、ぶどう園、蒸留酒製造所まで持つようになり、村民が必要とする衣食のすべてを自給し得る体制を整えるにいたつた。

一八〇七年になって、宗教覚醒の新しい波が、村全体を覆い、村民は結婚を否認し、独身生活に同意するようになり、煙草の使用も

禁止された。^④

一八一四年、村の敷地が狭すぎると不満をもつ者が増えてきたため、インディアナのポージー郡 (Posey County, Indiana) に、政府用地約三万エーカーを購入した。この土地は、オハイオ河の支流のワバッシュ河 (Wabash) 沿いであつた。翌一五年、彼らはペンシルヴァニアの資産を売却し、全村あげて (村民は約八〇〇ないし九〇〇人であつたといわれている) 新しい土地に移動した。^⑤

ハーモニイ (Harmony もしくは Harmony) と名づけられたこの新しい定住地は、河岸の広大で肥沃な平地であり、ぶどう栽培にはうってつけの小高い丘を背負つて位置していた。土壌は豊作を期待するに充分であつたから、彼らは直ちに、平地をとうもろこし畑と牧草地にしあげたし、丘はすばらしい果樹園と、見渡す限りのぶどう園に一変した。居住区の街路には針えん樹 (locust-trees) と桑の木を茂らせるようにした。——後にこの桑の木が村の重要な産業となる絹織物の生産に役立つようになる。村民の住宅は、煉瓦造りか木造であつたが、一軒ごとに果樹を植えて広い庭が四方を囲んでいた。また村にはラップ神父のための堅固な煉瓦造りの家、インディアンや外敵の攻撃に備えて、周囲に銃眼をつくりめぐらせた巨大な石造の穀物倉庫、木造の教会及び、各先端に一つずつ合計四つのドアのある十字架状の大きな煉瓦造りの建物と、四つの大きな建築物があり、いずれもが村の集会所に使用されていた。このうち十字架状の建物の二階は、くるみ、桜及びサスサfras (sassafras、訳註—北米東部原産のくすのき科の落葉樹) を用いた頑丈な柱で支えられて

いた。^⑥

村にはまた、絹工場、羊毛工場、鋸工場、煉瓦製造場、蒸留酒製造所、製油所及び染工場があった。ハーモニイはやがてこの地方の商工業の中心となっていた。

一八二二年にこの地を訪れたヘバート (Hebert, A.) は、村人は非常に豊かで満足しているように見えたと言ったが、村にはにぎやかな笑いとか陽気さが見られなかったことわっている。教会のほか、純粹に実利的な性格をもたない設備としては、ハンプトン・コート (Hampton court) にあるような迷路ないし迷宮といったものが存在するだけであった。これはぶなの木の生け垣で囲まれた迷路であり、その中心に小さなあづま屋があった。この建物の外壁は荒削りのままだが、内部はこの上なく精巧な装飾が施されており、聞くところによると、この建物は村の象徴であって、ラップ氏自身のデザインに成る、この世での魂の遍歴の跡と、遂に共産生活という理想の天国を見出すにいたる経過が描かれているのだということである。

一八二四年になって、村民は再び移住を決意した。表向きの理由はこの土地が健康に適さないということであったが、本当の理由は、この地に留まる限り村の生活は余りにも安楽に流れ、固い信仰と独身主義の誓いを忘れない恐れが生ずるため、やはり移動させるべきだとしたラップの方針に一応従ったものといわれる。そこでハーモニイは、かつて隣のイリノイ州にコロニーが創設された際に尽力したイギリス人、リチャード・フラワー氏 (Richard

ロバート・オウエンとニュー・ハーモニイ (1)

Flower) に村の資産の売却を委任した。

一八二四年夏、フラワー氏がブラックスフィールド (Blackfield) にやってきた。：オウエンはすでにラップ派の試みを知っていたし、しかもその知識は、協同主義に基づく村の建設に關しての彼独自の構想を固める上で、参考になっていたものと思われるので、フラワー氏がもたらした売却の話に、大いに心を引かれたのは当然である。つまり、彼の偉大な実験のための最適の舞台が、しかも、ありとあらゆる偏見や因習に凝り固まっていけない国で、すでに用意されていて、彼の登場を待っていたということになる。

オウエンの子供達も、それなりに期待に胸をふくらませた。私はフラワー氏の語るフロンティアの生活を聞いて有頂天になった。そして或る朝父が私に「さあロバート、お前はどちらをとる？ ニュー・ラナークかそれともハーモニイか？」と問いかけた時、私は即座に、「ハーモニイ」と答えた。とロバート・デイル・オウエンは述べている。

一八二四年の一二月、オウエンはハーモニイをその眼で見るために渡った。この時彼は(次男の) ウィリアムを伴ない、デイル・オウエンには留守中のニュー・ラナークの用事を託した。翌年の四月に彼は村の共産設備と二万エーカーの土地を、そっくりそのまま三万ポンドで購入した。^⑦ この値段は決して法外な値段とは思われなかった。ラピスト達は直ちにペンシルヴァニアに帰り、最初の居住地からさして遠くない所に敷地を定めて新しい村の建設に着手した。新しい村はエコノミー (Economy) と名づけられ、村は更に長年に

渡って繁栄し続けたのである。」^⑧

以上のとおりポドモアの『オウエン伝』(Frank Podmore, Robert Owen, A Biography, Two Volumes in One, 1906, Reprinted 1923 and 1968)における説明を長長と引用してきたのは次の三つの理由に基いている。

① ポドモアの原書の完訳本は、未だ出現していないこと。

② 『オウエン自叙伝』(The Life of Robert Owen, Written by Himself, 1868 五島茂訳『オウエン自叙伝』、本位田祥男・五島茂訳『自叙伝』)は永遠に未完の大著で、ニュー・ハーモニイに関する叙述はない。

したがって、戦前戦後を通じて、わが国の研究者による、オウエンの生涯に関する作品には、概ねポドモアのさきの記述を無批判的に採用する傾向が強かった。^⑨

③ だが肝心のポドモアの『伝記』におけるニュー・ハーモニイの説明(第三章及び第四章)は、ジョージ・ラップ及びラピストの活動について、当時の有益な資料を参照することができたにもかかわらず、ラップの人物、思想及びオウエンとラップとの交渉経過について十分な説明を与えていないこと。

しかしながら、ラップの人物像とハーモニイの、一八二四年までの歴史をより明らかにすることが、肝心のニュー・ハーモニイの実験経過の解明と、実験を通じてのオウエン思想を客観的に把握する上での前提となることはいうまでもない。そして次節以降に展開されるこの前提的努力の足がかりは、やはりさきのポドモアの説明の吟味を通じて獲得されるのが妥当であるまいかと考えたからである。

たとえば、ポドモアは、ニュー・ハーモニイの記述に際して、ノイエスの『アメリカ社会主義史』(John Humphrey Noyes, History of American Socialisms, 1870)を豊富に参照している。だが、ラップのカリスマ的人格に注目をはらわなかったポドモアは、ノイエスの次のような強い指摘を意識的に回避したのである。

「……彼ら(ラピスト)のすべては旧世界から新大陸への移住者であった。ペンシルヴァニアからインディアナへ、さらにインディアナからペンシルヴァニアへと移動した集団であった。迫害と裏切りと悪疫に耐えぬき、貧しきときも富めるときも、共に苦楽を分かち合った人達であった。彼らを結束せしめたものは彼らの宗教であり、その結束が彼らに繁栄をもたらす力を与えたのだ。ハーモニイの知恵とは何か、ファールンクス(Phalanx)を守り抜くための命がけの戦いとは何かを教えてくれるのは、この僅か一〇〇家族の苦闘が最適の例だとはいえないか、かの有名な「バラクラバ(Balakaba)の竜騎兵達」(訳註、一八五四年クリミア戦争)よりも、なんとあの「六百人」の雄々しいことか、」

ロバート・オウエンにインディアナの故郷を譲り、彼に共產主義の第一課を教えたのはかかる人達であったのだ。彼らは最も意気盛んであった頃の一〇年を、ワバシュの村の建設に費やした。彼らはその一〇年を、彼ら自身のためばかりでなく、その後に関与された、神を信じない異端者の巨大な実験のための舞台づくりに奉仕したのであった。^⑩

ノイエス(John Humphrey Noyes, 1811~1886)は、オナイダ共產村

(Oneida Community 一八四八年創立)の創設者であり、完全主義者(perfectionist)であり、宗教的共産主義者である。一方、ポドモアは生粋のフェビアン社会主義者である。従って、両者の抱いたオウエン観に基本的相違があるのは当然であるが、後者が、オウエンの宗教的性格を誤解していたことは、コール(G.D.H. Cole, 1889~1959)も非難しているところであり、^⑪オウエンの思想の基底となる特異な宗教的性格を無視しえぬ者の立場からのオウエン研究では、ポドモアが無視なしいた軽視の部分の探掘が、今後極めて重要となることを指摘しておきたい。

ところで、ポドモアの作品の引用を通じてオウエン渡米以前のハーモニイの状況を或る程度把握することができた。そこで問題となるのは、オウエンが、渡米以前に、ラップのこと、ハーモニイの活動状況について或る程度の知識を有していたという点である。

ベエヤアは、オウエンがラピストを知ったのは、さきの引用で明らかにになったとおり、エバンスの著書などによるといい、ポドモアは、リチャード・フラワーがブラックスフィールドのオウエン邸を訪れた一八二四年夏以前に、オウエンがラピストの試みを知っていたとし、その時期は彼が *A New View of Society: tracts relative to this subject* を出版した一、二年前(つまり一八一六、一七年)であると次のように述べている。

「殆んど知られていなかったペンシルヴァニアのラピストの共産村のことがこの国である程度知られるようになったのは、(出版の年より)一、二年前のことである。アメリカ人旅行者ジョン・メリシ

ロバート・オウエンとニユー・ハーモニイ (1)

・ (John Melish) は、一八一〇年又は一一年にセツルメントを訪れ、彼の地で見聞した友愛と物質的繁栄について、熱情をこめて解説した。この本について、一八一五年の『博愛主義者』誌は長文の論評記事を書せた。オウエンがメリッシュの本を読んでいないとすればこの論評記事に目をとおしたことは、おおむね確かである。^⑫

さて、ベエヤアは、エバンスの *Christian Policy* (1818) および匿名の著者の *Mr. Owen's Proposed Arrangements* (1819) によって、オウエンがハーモニイを知ったといい、ポドモアはそれより早く、一八一六、七年頃にメリッシュの旅行記又は、その関連記事を、『博愛主義者』誌で読んだと述べた。

当時のオウエンは、一五〇年前に書かれたベラーズのパンフレット (*Proposals for Raising a College of Industry of all useful Trades and Husbandry, By John Beliers, 1696*) を入手しており、アメリカのシェーカー (shakers) の活動にも大きな関心を寄せていた。シェーカーからの通信とベラーズのパンフレットを再び『新社会観』と題した小論文^⑬集に集録して広く頒布しており、更に『自叙伝第一巻』の付録にもこの二つのパンフレットを集録していることを考えれば、^⑭いかにオウエンの後半の生涯にシェーカーの活動が大きな影響を与え続けたか、容易に想像することができる。オウエンは『自叙伝』の追録にこう書き加えている。

「私はまた、一八一七年私の他のパンフレットとともに公刊した『震教徒の起原および行為のスケッチ』について一言することを忘れていた。北米合衆国におけるこれらの奇妙な人びとの成功した実

際についての話は示す。きわめて劣悪な協同社会の生活によってさえも、富はややすとすべての人びとにむかつて創られえたから、比較的短期間に、全構成員が、貨幣なし・物価なしで富裕が得られ、欠乏のおそれから除かれえた、彼らが四季の規則正しさをもって、健康と慰安とに必要なすべてのものを供給されえ、また供給されるであろうことを経験で知って。そしてこれらの人びとはいまや多年の間、個人的競争制度のもとに生きている同じような数の人びとよりも、モラルも行為もはるかに正しいものであることを証明してきた。この「スケッチ」は付録に再刻してある。

私有財産なき大衆に基礎をおくこれら震教徒の協同社会は、黄金時代の生存状態の準備をするため、実際における進歩の第二段階を示してきた。

第一、段階はすべての人にむかつてのすぐれた肉体的・精神的性格を形成することであった。第二、段階はすべての人にむかつての豊かな富を創造することであった。そして第三、段階は二つの第一のものを結びつけることであろう。社会をその真の原理の上に基づかしめることによって、また性格をよくつくり・富を創造し・世界中一つの利益一つの感情に心から統一するような環境の仕組みのうちにすべての人をおくことによって。それはいまや環境の最も美しい新結合によって実行しとげられるであろう。^⑮

五島茂氏は、この「追録」の執筆時期を一八五七年と断言されている。つまりオウエン永眠の年の前年である。また彼は、一八五六年三月から、一八五八年七月にかけて、最後の個人誌『千年王国雑誌』

(Robert Owen's MILLENNIAL GAZETTE, No.1-16)を発行している。その第二号に、シェーカーの一員エバンス (F. W. Evans) がニュー・ヨークの一週間紙に送った、オウエンあての公開書簡を掲載し、第三号には、これに対する返書をトップに掲げている。彼はその末尾で、自分は八五歳より若い男であるが、シェーカーに参加して、その繁栄と、世界の光明となる人びととをできる限り援助したいと述べている。この書状の日付けは、一八五六年四月六日であるから、彼は確かに八五歳より若かった。八四歳一ヵ月だったからである。^⑯

シェーカーの共産村が、「ヨハネの黙示録の女性」といわれたアン・リー (Ann Lee, 1736-) の指導によってアメリカに生れたのは一七八七年であり、今なお少数の教徒が共同体を維持しているといわれ、カンター女史は、これをアメリカで最も成功した共産村とみている。また彼女はラピストのハーモイ杜団をその第二位にあげているが、^⑰ 以上のようにシェーカーに親近感を持ち続けたオウエンが、ラップとハーモニーに関心を寄せるのは当然である。

この点、さきに述べたベエヤアとポドモアの記述の相違をめぐって、一応の結着を与えてくれたのはベスター (Arthur Bestor) であり、ハリソン (J.F.C. Harrison) である。

まずベスターは周到な考証の末こう断言する。

「オウエンとアメリカの共同体運動の歴史との重要な結びつきは、インディアナのハーモニーに住んでいたラップ派である。彼はハーモニーを自己の実験場とすべく即座に購入した。この取引は通常のものではなかった。なぜなら、オウエンは少なくとも一〇年以上前か

らラップ派のことを知っていたし、一八二〇年にはラップ神父に自分の著作物を一括して送り、ペンシルヴァニアとインディアナでの実験の詳細を知らせてくれるように依頼しているからである。」^⑧ハリソンも同様のプロセスを経て次のとおり理解するのである。

「彼(オウエン)は、ウィリアム・アレン (William Allen) が発行した『博愛主義者』誌に、ジョン・メリッシュのハーモニストの記事が掲載された一八一五年以来、ラップ派のことを承知していた。一八二〇年、彼は自己の共産村の実験のことをラップ神父に連絡している。そして一八二五年には、インディアナのハーモニイのセツルメントを彼自身のニュー・ハーモニイの共同体主義的実験 (communitarian experiment) の為に、ラップ派から購入している。かくて、アメリカにおけるオウエン主義は、この国で創められた一共同主義の伝統の物質的、理知的後継者として、セクト的共産主義の世俗的咀嚼に努めることになる。」^⑨

ウィリアム・アレンは一八一四年初頭からのニュー・ラナークの合資者の一人である。オウエンは『自叙伝』の随所で、クウェーカーである彼の宗教観や教育原理を非難しているが、アレンの主宰した『博愛主義者』を読み、それを通じて、フェレンベルグ (Fellenberg) の教育論を学んだと同様に、これを通じて、ラップ派の活動を学んだことはほぼ確実である。一八二〇年のラップあての通信に対して、オウエンがハーモニイから直接返事を受けたかどうかは不明であるが、彼がシエーカーに抱いたと同様の関心をラピストに寄せていたことは簡単に想像がつく。従って一八二四年夏、フラワーがハーモニイの売却

の相談に訪れたとき、即座に承諾の回答を与えたとしても不思議ではない。

オウエンのユートピア計画、つまりハリソンのいう secular version of sectarian communism の具体的構想は、彼が下院救貧法委員会に報告書 (Report to the Committee of the Association for the Manufacturing and Labouring Poor) を提出した一八一七年三月の直前には、ほぼまとまっていた。特異な宗教感覚に溢れたオウエンが、構想の具体化のよすがにと、シエーカーやハーモニストの活動に注目するのは当然である。しかも一八一八年以降、ニュー・ラナークの合資者との関係は悪化の一途を辿る。従って海の彼方の特異なカリスマ的存在と、その指導下に展開される宗教共産村の動きに敏感とならざるを得なかったオウエンの心情は充分理解できる。では、ジョージ・ラップとはいかなる存在であったか?、それが次節の課題となる。

① 拙稿「ロバート・オウエンの家系及び宗教的(メソジスト的)性格について」『仏教大学社会学部論叢』第九号、一九七五年。

② Max Beer, *A History of British Socialism*, 1923, p.p. 180-181.

③ 大島清訳『イギリス社会主義史(二)』岩波文庫、一九七〇年、三八ページ。
Frank Podmore, Robert Owen, *A Biography*, 1906 [2 Vols. in 1, Rep. in 1968] p.p. 285-289.

④ Podmore, *Ibid.*, p. 286, n.1. の原註は次のとおりである。

「これらは何らかの強制をともなったものではなかった。 Nordhoff (The Communist Societies of the United States, p.73) は、独身律の採用を拒否した者は退村したと述べている。しかしハーモニイを訪れ、一八二二年当時の村の風習を見た Hebert は、当時でも結婚は許されていたし、彼が訪れた年の約三年前に結婚式があったと述べている。」

- (A Visit to the Colony of Harmony in Indiana. London, 1825)
 ⑤ Ibid., p.286, n.2. (原註)「村民数は移民受け入れによるものといわれてゐる。」

- ⑥ Ibid., p.287, n.1. (原註)「Herbertは十字架状の建物を教会だといつてゐるが、尖塔と二つの重い鐘を備えた木造の建物の方が教会であつた。The New Harmony Gazette (Vol. 1, p.22)は十字架状の建物をタウン・ホール (Town Hall)と呼んでゐる。事実、オウエンの時代にはこの建物は村の集会やコンサートなどに使用された。Robert Dale Owenは(直伝とこれを) a spacious cruciform brick hallと書つてゐる。」

- ⑦ Ibid., p.288, n.1. (原註) R. Dale Owen (西二一ピーシ) Nordhoff (p.76), New Harmony Gazette, Vol. 2, p. 353 (オウエンのフイラデルフィア演説の報告)によれば、オウエンが動産、不動産のすべてに支払った合計額は約一四万ドル——つまり二万八千ポンドとなつてゐる。またNew Harmony Gazette, Vol. p. 14では土地はおよそ三万エーカーありこのうち少くとも三千エーカー以上は耕地化されてゐたとある。Manchester Correspondence に保管されてゐた一八二五年五月二日付けの売買合意書によると、ラップ氏はオウエン氏に以下を譲渡したことになる。『二〇、〇九七エーカーの土地及びこれに付属するすべての保有物、建物、用具一式、一切の付属物(町の時計、鐘、及び宿舍にあるすべての家具什器一切)、銅製の醸造釜、染色用釜ならびに鍛冶屋の道具一式を九、五〇〇ドル(一、九四五一ポンド)で譲渡する』したがって残りの約四〇、〇〇〇ドルは家畜及び個人財産の値段であつたことは疑う余地がなく。」

- ⑧ Ibid., p. 289, n. 1 (原註)「読者は定めしラピストの共産村の最期について知りたいとお考えであらう——村の終末は開村から丁度百年後にやつて来た。一八四七年、ラップ死亡後も村は繁栄し続け非常に裕福になつた。だが村民数は急速に減少した。一八九〇年頃数名の役員が選ばれた。John S. Duss もその一人であり彼は後に村の管財人兼管理人となつた。一九〇三年、村はこのDussと彼の妻を含め僅か六人になつてしまつた。同年の春、エコノミーの町と土地はおよそ四〇〇万ドルで一土地会社に売却された。この金は生き残つてゐた村民に分配された。(Philadelphia Press, April 18, 1903; Philadelphia Ledger, May 2, 1903)」

- ⑨ ロバート・オウエンの生涯をまとめた、わが国研究者の作品の主なものとして次の一〇点をあげることができる。

河上肇「ロバート・オーエン(彼れの人物、思想、及び事業)」河上肇『社会問題研究』第十四冊、一九二〇年四月号以降に連載されたもの。
 北野大吉「ロバート・オーエン—彼の生涯・思想並事業」同文館、一九二七年。

五島茂「ロバート・オウエン」『社会科学の建設者、人と学説叢書』三省堂、一九三四年。

森戸辰男「オウエン・モリス」『大教育家文庫』岩波書店、一九三八年。

波多野鼎「人道主義者ロバート・オウエン」惇信堂、一九四六年。

住谷悦治「シモン・オーエン・フリーエ、ユートピア社会主義」鯉書房、一九四六年。

浅井喜久雄「英国社会主義—ロバート・オウエン—」社会思想研究会、一九五三年。

宮瀬睦夫「ロバート・オーエン—人と思想—」誠信書房、一九六二年。

白井厚「オウエン」(世界思想家全書)牧書店、一九六五年。

五島茂「ロバート・オウエン」家の光協会、一九七三年。

- ⑩ John Humphrey Noyes, History of American Socialisms, 1870, Rep. in 1963 and 1966, p.33.

- ⑪ G.D.H. Cole, The Life of Robert Owen, 1935, p. 340.

- ⑫ Podmore, op. cit., p. 232.

- ⑬ 一八一八年に公刊された、『新社会観・小論文集』の表紙は次のとおりである。五島茂氏は、この作品のモチーフについて、ポドモアを引用しながら (cf. podmore, Ibid., p.251)、「前年九月一九日のアドレスを書

NEW VIEW OF SOCIETY.

TRACTS

RELATIVE TO THIS SUBJECT;

VIZ.

Proposals for Raising a Colledge of Industry of all useful Trades
and Husbandry. By JOHN BELLERS.

(Reprinted from the Original, published in the year 1696).

Report to the Committee of the Association for the Relief of the

Manufacturing and Labouring Poor.

A Brief Sketch of the religious Society of People called Shakers

WITH

AN ACCOUNT OF THE PUBLIC PROCEEDINGS

CONNECTED WITH THE SUBJECT,

Which took place in London in July and August 1817.

PUBLISHED

BY ROBERT OWEN.

LONDON :

PRINTED FOR LONGMAN, HURST, REES, AND BROWN,
PATER NOSTER ROW ; CADELL AND DAVIES, STRAND ; J.
HATCHARD, PICCA DILY ; MURRAY, ALBEMALE-STREET;
CONSTABLE AND CO., AND OLIPHANT AND CO., EDINBURGH;
SMITH AND SONS, AND BRASH AND REID, GLASGOW ; AND
SOLD BY ALL THE BOOKSELLERS IN TOWN AND COUNTRY.

ロバート・オウエンとニュー・ハーモニー
(1)

⑭ A Supplementary Appendix to the First Volume of The Life of Robert Owen, Volume 1A, 1858, pp. 145-181.

¹⁶ Robert Owen's *Millennial Gazette*, No.1-16, 1856-1858, (Reprinted

as AMS edition in 1972), No.2, pp.3-10, No.3, pp.1-9.

①⑦ Kanter, op. cit., p.246.

³⁷ Arthur Bestor, *Backwoods Utopias, The Sectarian Origins and the Owenite Phase of Communitarian Socialism in America*, 1663-1829, 2nd Enlarged Edition, 1970, p.48, n. 33 and p. 143, n. 37.

⑤ J.F.C Harrison, Robert Owen and the Owenites in Britain and America, *The Quest for the New Moral World*, 1969, p.54.

三 ジョージ・ラップとその教説

一七世紀に入って、プロテスタント教会が漸く固定の時代に入り、その神学が或種のスコラ神学的色彩を強めるに及んで、ドイツの大学の風俗は乱れ、「悪徳と不信心の温床」と化し、教会は「無意味な儀式の多様性」を誇るのみで、霊的勢力に充ちた説教は聞かれなくなつてしまつた。「偏狭な信仰と聖書の限定解釈に終始する牧師が厚遇され、無神論者や合理主義者が説教壇を占拠し、しかも教会がこれを保護している」^①事態に反抗して、宗教的情念と内的生命を重んずる運動が、アルント (Johann Arndt, 1555~1621)・アンドレヒ (Valentin Andreae, 1588~1654)・シッペーナァ (Philip Jacob Spener, 1635~1705)・フランケ (August Hermann Francke, 1663~1722) 達の指導によつて生れた。一七世紀の間に顕在化するこのドイツ清教徒主義の原型は、敬虔派 (Pietism) と呼ばれる。

敬虔派は、ことさらに新しい教理を立てたわけではなく、形式神学の理論的吟味よりも聖書に帰るべきことを主張し、心靈の光を有せるもののみ聖書を理解し得ること、聖霊の潔き力により更生せる者のみ心の光を有することを力説したのであって、初志としては正統派教会 (ルウテル派) の内部に留まり、その内部改革を企図し教会から分離して、独立の教会を持つとは考えていなかった。

だがキリストの再来を信じ、中世的で質朴な信仰の保持に努めていたウルテンベルグの穩健な敬虔派は初期のメソジスト派のように、

教会とは別個に信徒の小集会を催していた。このウルテンベルグのイプチングンの町に、「万人司祭」の典型ともいうべきジョージ・ラップ (George Rapp 1757~1847) が生れたのである。中流の自作農兼どう栽培者の子として生れたラップは、極く普通の子として公学校に学び、学業を終えてからは、夏は農耕に、冬は手機 (てばた) に精を出して父を助けていた。二六歳になつて、近くの農民の娘と結婚し、一男一女をもうけた。^②読書好きで、会話好きであつた彼は、聖書、とりわけ新約聖書に親しみ、キリスト者とよばれるからには、「キリストとその使徒達の教えにもとづく勤めと実行なしには生きていくことはできない」と確信するようになり、折りにふれて近郷の農民に、自己の信念を語るようになった。^③

三十歳頃から、自己が所屬していた国教会では必要な精神的栄養を得ることが困難であるとして、毎日曜日、自宅に少数の友人を集めて、自己流の説教をはじめようになつた。彼の話を聞こうとする者が、徐々に増え一〇〜一五キロも離れた他の町からも集まるようになり、彼らがアメリカへの移民を考え出した頃にはその追隨者は三百家族以上にもなつていた。

国教会の牧師達がラップの宗教活動に反対するのは当然であつた。彼らは行政当局を扇動して、ラップとその信奉者を弾圧しようとした。しかしその試みも当初は失敗であつた。なぜなら、ラップは常に信者に対して、法を守ること、教会や世俗機関へのあらゆる税金はすすんで納めることを説いていたし、教会から分離せよとは指導していなかったからである。

そこで教会側は警察を使喚して別の弾圧の手を考えた。毎日曜日にラップの自宅又は、ラップの現われた場所に集うすべての者を警察官に調査させ、その結果にもとづいて毎月曜日、治安判事が、違法集会出席を理由に信者に罰金を科する。貧困のため罰金を支払えない者は拘禁してしまうという方法である。

度重なるこの種の迫害にも相互扶助で耐えぬこうとするラップ派の根絶を企図した教会は、遂にウルテンブルクの国王に対して、ラップとその信者の国外追放を命ずるよう請願を行った。だが、率先してあらゆる教会税・国税を納めており、しかも彼らは善良で勤勉な市民であることを調査の上で知った国王は、「彼らの気の向くままに信ぜしめよ」と、その請願を認めなかったのであった。

国王の請願却下にもかかわらず、地方のあらゆる世俗の権力を巻き込んだ教会の手のこんだ弾圧はさらに続き、近隣住民も彼らを白眼視するようになり、彼らが、「この迫害は、神がわれわれにこの国を去れと命じ給うている証しである」と思いこむようになるまで執拗に重ねられた。

周囲の迫害が強まり、初志に反して「分離主義者」(Separatists)の烙印が押されるに及んで、ラップはますます自己の召命を確信し、その信奉者達の宗教的情熱をかきたたせたのであった。

一八〇三年になって、ラップは息子のジョン及び二人の同信者と連れ立って、アメリカへ避難の地を求めて旅立つのであるが、ここで注意しておかなくてはならないのは、ラップのアメリカ行きは信者達の要請によったのであり、自身の決断が先行したのではないこと、この

時点では彼らは未だ正式に組織化された結合社会ではなかったという点である。^④

だがジョージ・ラップの独創的な教理は彼がアメリカに旅立つ以前に一応完成していたものとみられる。この点に関してロックウッド(George B. Lockwood)は「ラップ教徒には成文化された釈経(credo)がないことを彼らが認めているため、ラップ及び信者の意見に従うより道がない」と限定した上で、ラップは自ら「アダムの二性」(the dual nature of Adam)と称えた不思議な教理を展開させたと説明している。^⑤

つまりラップは創世記第一章第二六及び二七節の

「また神が言った。『われらの像に、われらに似せて、人を造ろう。そしてこれを海の魚、空の鳥、家畜、すべての野(獣)と、地を這うすべてのものを従わせよう』。そこで神は、人をみずからの像に創造した。すなわち、神の像にこれを創造し、男と女とに創造した。」^⑥

というくだりを読んで、アダムは最初は自らの中に二つの性的要素を含んでいたのだと解するのである。かくてラップは当初は創造者も二つの性を兼ね備えており、アダムはこの根源的な状態に留ることが許されたからこそ女性の援助を受けることなしに子を産むことができた筈であった。だがアダムがこのことに不満を抱くようになるや、神は彼の身体から女性の部分を切り離してしまわれた。この時から人性の墮落が始まり、その原罪の責が全人類に及ぶようになったと説くようになる。

さらにラップは独身律の保持が、神の恩寵にかなひ、世界の再生と、人間を当初のアダムの状態にひきもどす道に通ずるのだと考えるようになる。

もっとも先にあげたようにラップ自身も結婚していたし、かつては彼が結婚式を司祭したこともあり、村内で結婚が実質的に廃止され、独身律が採用されるようになるのは、アメリカ移住後の一八〇七年以降であるが、ラップはドイツ時代から禁欲を奨励していたものと思われる。

彼は、禁欲の宗教的礎石を『新約聖書』の随所から求め、信仰上の危機を克服するためにも、純潔を保持し、「神と小羊とにささげられる初穂として、人間の中からあがなわれた者」(ヨハネ黙示録・一四の四)の道を歩もうと説いたのであった。

またラップはキリストを第二のアダムと考え、「天にいる御使(みつかい)のように、めとったり、とついたりしない」(マタイ・二二の三〇)と、一種の「キリスト二性論」を展開し、さらに「使徒行伝」の次の一節、つまり、

「信じた者の群れは、心を一つにし思いを一つにして、だれひとりその持ち物を自分のものだと言張する者がなく、いっさいの物を共有していた」(四の三二)

を根拠に、信者の資産の共有を主張し、全員の再生のため、救世のために共産制が不可欠であると考えていた。

教会改革の必要を痛感するの余りに、神学の知識を積み上げるよりも、恩恵による撰びの思想にもとづく實際的信仰の育成につとめたド

イツ敬虔派の論理的不徹底性についてはウェーバー(Max Weber, 1864~1920)の指摘するとおりであり、ラップの主張もまたその例外ではなかった。したがって「大陸(ネーデルランドおよびライン下流地方)の改革派における敬虔派」についてのウェーバーの次の観察は、基本的にはラピスト社会の成立にも適合するといえる。

「Praxis Pietatis (敬虔の実践)があまりにも強調されたため、教義の正当性は背後に退いてしまい、ときとしては全く問題にされないうほどであった。救いに預定された者が教義上の誤謬におちいることがあるのは、その他の罪のばあいと同様であるし、また経験によつてみれば、抽象的な神学には通曉しないキリスト者が極めて明瞭な信仰の果実を育てあげることも多く、反対に、単なる神学上の知識があるからといっても、それはおよそ撰びの確証とはなりえないと考えられた。こうした敬虔派の信徒は公式には依然として教会に所属していた——これは彼らの特徴の一つである——が、そうした神学者たちの教会には深い不信をいだき、俗世からはなれて「敬虔の実践」の信奉者のみの「集会」をつくりはじめたのである。彼らは聖徒の見えざる教会を地上に曳きおろして見ゆるものにしようとしたのであり、分派の形成という帰結をさけながら、しかもそうした集会という共同体の内部に止まって、俗世の勢力とは無関係な、どの点でも神の意志に適う生活をおくろうとし、またこれによって、日常生活の外面的な標徴についても、自己の再生の確信をもちつづけたいたと考えたのである。こうして真実に回心をへた者たちのみの *ecclesiola* (小教会)は——これも敬虔派のすべての流派に共通するものであった——

禁欲の強化によって、この地上にありながら神との交わりの喜びを味いべきものであった。^⑩」

敬虔派が世俗的禁欲を貫徹くためには職業労働に専念することが最も秀れた手段となった。「報酬のためでなく、使命たる職業のために、また主と隣人の事のために日傭人のごとく働く」ことが、神の特別の恩恵にかうこと、神は労働の成果をとおして、信ずる者に祝福を与えたまうと彼らは確信した。この点に関しては彼らは清教徒 (Puritans) の場合と変わらないが、使命たる職業 (um des Berrufs Willen) のみの労働に幸福 (Glückseligkeit) を味わひ、労働の成果については、「主のために用いるほか、一切の肉につけるものを……軽しとし、何物をも持たないか、或いは得たものをすべて他にあたえる」ことによって救いを確認しようとしたラピストの歴史は、アメリカの清教徒の歴史とは区別されるべきである。

「敬虔な生活の実践」のため、禁欲の強化と職業労働への誠実と、いっさいの物の共有を救いの手段として独自の教派 (sect) が形成された。ラピストとよばれる敬虔教団の一派は、みてきたように指導者ラップが自宅で説教を開始した一七八七年頃から、彼が信者の要請によって避難の地を求めてアメリカに旅立つ一八〇三年までの間に、正統派教会の迫害の中で熟成されたものであった。

そしてこの同信者の集団は次節で述べるとおり、一九〇五年からは正式にハーモニー社団 (Harmony Society) とよばれる共同体を結成し、ほぼ一〇〇年にわたってフロンティアのきらめく星となるのである。最盛期でも一、〇〇〇人をこえることのなかったこのドイツ農民

の小さな共産村が、ともかくにも二〇世紀の初頭まで存続し得たのは、創設者の組織才幹と人格の豊かさに依存するところが大きいといわねばなるまい。

指導者ジョージ・ラップの人格や行動について、ロックウッドは次のように述べている。

「ハーモニスト (Harmonists) の指導者ラップは、身長およそ六フット (一・ハメートル)、長老にふさわしいあごひげをはやし、威厳のある歩きぶりをし、教徒の尊敬を一身にあつめていた。しかも彼は陽気で親切で、常に誰とでも腹臍なく話し合い全員から愛されていた。^⑪」

またハーモニー社会の前半の歴史を最も忠実に記録しているといわれるウイリアムス (Aaron Williams) の著書には、

「彼は開祖であり、神父であり、君主であり、宗俗両面にわたる完全な首長であった。彼はあらゆる規則の作成者であり、すべての問題処理にあたっては最高の裁決者であった。村では彼の言葉が法律であった。ラップ神父がかく言われた」と言えばどんな事柄についても全員が了承した。

だがこの絶対権力はいやすくも利己的に、或いは圧制的に用いられたことは一度もなかった。彼を父と崇め、そして愛するすべての信者の心身両面の福祉 (temporal and spiritual welfare) の確保に専念する彼の家父長的精神に全幅の信頼を置いた信者達は、誰一人としてその絶対権力に微塵も疑いをはさんだ者はなかった。^⑫」と述べられている。

このワイリアムスの記録を参考に、さらにハーモニイの終末までの経過を概括した無名の著者の『資料』^⑬(以下『ハーモニイ概観』と述べる)によれば、

「彼(ラップ)は毎日曜日に二回つつ説教するのをならわしとしていた。彼の日曜説教は死の二週間前まで続けられた。健全な肉体に驚異的な活力を秘めた彼は一刻もゆるがせにはしなかった。農場や工場で働く者をはげます彼の姿が見えぬ時は、天文学、機械学、地理学、植物学を学んでいるか、次の説教の準備をしていた。週日の夕には彼は各グループ別の会合に出席し、宗教上の助言や、牧師としての他の任務を果たしていた。…彼のわかりやすい講話は全員に喜ばれたし、親切な助言と万人への思いやりから、ラップ神父は全員から愛された。温情主義が彼の立場であった。だがここで注意しておかなければならないのは、ハーモニイはそれを民主主義と認めたドイツ人が構成する社会であり、アメリカは共和国になって日の浅い時代であったということである。信者はその罪をラップに告白し、彼の許しと、生活の支えとなる忠告を受け続けていたのである。」^⑭とある。

信者への絶対的權威を保持し、しかも絶対的信頼を得ていたラップが健康に恵まれ、九〇歳の長寿を保ったこと、しかもその間の彼は倦むことなき精力を、信徒全体の結束と、個人の内面生活の指導にのみ注ぎ、村の實際運営や、村外業務の一切は、養子のフレデリック(Frederick Reichert, 1775~1834, アメリカに到着後ラップの養子となり、Frederick Rappと称せし)にまかせきつたこともハーモニイに永続と繁

栄をもたらした理由にかぞえることができる。

そこで次節においては、オウエンの「ニュー・ハーモニイ実験劇」に、完備した舞台装置を提供するにいたるまでの、ハーモニイの変遷を概観することしよう。

① George B. Lockwood, *The New Harmony Movement*, 1905 (Reprinted in 1971), p.7.

② 息子 John は父と共にアメリカに渡るが、一八二二年肺病で若死にする。娘の Rosina は、父の死後、一八四九年に Economy で死亡している。ラップの信念の形成に影響を与えた文献の著者として、ウィルソン(William E. Wilson)は、シュライマッハー(Friedrich D. Schleiermacher, 1768-1834)・ヤコブ(Friedrich Jacobi)・エンゲスティアング(Heinrich Jungstiling スウーデンボルグ学徒)・ヘルダー(Johann Von Herder, 1744-1803) をあげている。(cf. Wilson, *The Angel and the Serpent, The Story of New Harmony*, 1964, p.7) ラップが、カント、スピノザの研究からプラトンなどの古代哲学に及び後にシエリング、シュレーゲル兄弟、テイクなど結んでロマン主義を代表した彼より一歳も若いシュライマッハーの汎神論に注目したかどうかは大いに疑問であるが、ウィルソンが重視した如く、ヘルダーに啓発されたことは確実である。文学を愛したヘルダーにはルソー、シェークスピアの感化があり、ゲーテとの親交を通じてワイマールの宮廷牧師となつた彼の名著『歴史哲学の観念』(Ideen zur Philosophie der Geschichte des Menschheit, 1792)に盛られた人道的聖書中心主義の主張は、ラップの教説の中心になっているといつて良い。また、民謡を愛し、民謡に盛られた人民精神の尊重を教えたヘルダーにならってラップは自ら平易な宗教的音楽作品の作詩、作曲につとめたことも注目しておいて良い。

④ Aaron Williams, *The Harmony Society at Economy, Penn'a, 1866* (Reprinted in 1971), pp. 36-37.

⑤ Lockwood, op. cit., p.9.

彼がこの書物を書いた一〇年後、ラップ派が再びペンシルヴァニアに移住する直前に、ハーモニイの村内の印刷所で製作された、ラップ神父の *Thoughts on the Destiny of Man*, 1824 が彼らの唯一の *Credo* である。ウィルソンは、本書と、ヘルダーの『歴史哲学の観念』との相似性を論じている。(Wilson, op. cit., p.8)

⑥ 中沢治樹訳「旧約聖書『聖書』(世界の名著⑩) 中央公論社、六〇ページ Lockwood, op. cit., p.10.

以下の引用は日本聖書協会「小形英和対照新約聖書」一九七二年による「マタイによる福音書」(第二章第三〇節)

「復活の時には、彼らはめとったり、とついでりすることはない。彼らは天にいる御使(みづかい)のようなものである。」

(第一章第一〇〜一二節)

「弟子たちは言った。もし妻に対する夫の立場がそうだとすれば、結婚しない方がましです。するとイエスは彼らに言われた、その言葉を受けいれることができるのはすべての人ではなく、ただそれを授けられている人々だけである。というのは、母の胎内から独身者に生れついているものがあり、また他から独身者にされたものもあり、また天国のために、みずから進んで独身者となったものもある。この言葉を受けられる者は、受けいれるがよい。」

「コリント人への第一の手紙」(第七章第七〜八節、二五〜二七節、二九節)

「わたしとしては、みんなの者がわたし自身のようになってほしい。しかし、ひとりびと神からそれぞれの賜物をいただいて、ある人はこうしており、他の人はそうしている。次に未婚者たちとよめたちとに言うが、わたしのように、ひとりでおれば、それがいちばんよい。」

「おとめのことについては、わたしは主の命令を受けていないが、主のあわれみにより信任を受けている者として、意見を述べよう。わたしはこう考える。現在迫っている危機のゆえに、人は現状にとどまっているがよい。もし妻に結ばれているなら解こうとするな。妻に結ばれていな

いなら、妻を迎えようとするな。」

「兄弟たちよ。わたしの言うことを聞いてほしい。時は縮まっている。今からは妻のある者はないものように。」

「テサロニケ人への第一の手紙」(第四章第三〜五節)

「わたしたちがどういう教を主イエスによって与えられたか、あなたがたはよく知っている。神のみこころは、あなたがたが清くなることである。すなわち、不品行を慎み、各自、気をつけて自分のからだを清く導く保ち。」

「ヨハネの黙示録」(第四章第四節)

「彼らは、女にふれたことのない者である。彼らは純潔な者である。そして小羊の行く所へは、どこへでもついて行く。彼らは、神と小羊とにささげられる初穂として、人間の中からあがなわれた者である。」

⑧ Williams, op. cit., pp.100~101.

⑨ Max Weber, *Die Protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus*, 梶山力・大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(下)(岩波文庫)九七〜一三〇ページ

⑩ Weber, op.cit., 梶山・大塚訳、九八〜九九ページ

⑪ Lockwood, op. cit., p.19.

⑫ Williams, op. cit., p.40.

⑬ The Harmony Society in Pennsylvania (発行年代不明)

全五七ページのこの資料は、ハーモニイ社団の最後のメンバーであった John S. Duss の未刊のメモおよび Aaron Williams の記述を参考に「ハーモニイ社団の歴史に関して最も完全でかつ信頼できるものとして公衆に贈られる」という前言を付した、著者及び発行年月日不明のものであるが、Williams, *The Harmony Society at Economy, Penn'a*, 1866 及び *Harmony Society, Thoughts on the Destiny of Man*, 1824 ともに Augustus M. Kelley によって一九七一年復刻された。なお、John Duss のメモは一九四三年に刊行された John A. Duss, *The Harmonists: A Personal History*, Harrisburg, 1943)。

この資料の印刷はそれ以前であることは確かであろう。ラップ及びハーモニイに関する資料の詳細については Arthur Bestor, *Backwoods Utopias*, 1950, pp. 296~297 参照のこと。

⑭ The Harmony Society in penn'a, pp. 43~44.

四 ハーモニイ前半の歴史

読書好きのジョージ・ラップは、地理にも関心をもっていた。彼は宗教的自由の地を、当初はルイジアナに描いていた。だが、フランス政府が植民地を合衆国に売却したという話を聞いた彼は、アメリカと交易中のオランダ人商人に照会して、「千年王国」(millennium) 的理想の実現には、南部よりも北部が良からうという示唆を得ている。

四五歳の彼が、二八歳の若い石切職人、フレデリック(後に養子となる)に、妻(Christina Benzinger)と娘(Rosina)のこと、信徒のこと、一切の後事を托して、実子ジョンと一人の信者を伴って、ウェルテンブルグのイプチンゲンを出発するのは一八〇三年(つまりアメリカがフランスよりルイジアナを買収した年)である。ライン川を下り、アムステルダムからカントン(canton)号に乗船し、フィラデルフィアに到着したのは、同年一〇月七日である。その際ラップは、自己の資産を売却して得た二千グルデン(約八〇〇ドル)を携行している。^①

適地を求めて、メリーランド、ペンシルヴァニアの州内はもろろん、遠くオハイオ州のタスカラワ郡(Tuscarawas County)までの各地を巡歴した上で、ペンシルヴァニア州バトラー郡(Butler County現在ハベア County)の南西部のセリノープル(Zelienople)とてう寒村の隣

接地を定住の地と定め、ある個人(Detmar Basse)から四、五〇〇エーカー(一八平方キロ)の荒地を一エーカー当り二・五ドルで購入する契約を取りかわした。^②

彼が、「その地は自然の景觀には恵まれているが、樹木や雑草が繁茂していて開墾は容易ではないこと、道路が少なく、郡役所が孤立する寒村セリノープルに設置されたばかりの僻地であることを承知の上で、あえてその地を選んだのは、その地がピッツバーグ(Pittsburg)に二六マイルの地点にあり、当座の日用品の購入に便利であると考えたためである。もっともラップは、荒地開拓の困難さを重々承知していたので、本国で待つフレデリックにあてて、移住を決して強制してはならぬと書き送っている。」^③

だが、『ハーモニイ概観』によれば、ラップの上陸後一年もたたぬ一八〇四年七月四日には、三〇〇人がオーロラ号(the Aurora)でバルチモアに到着し、次いで一か月後には、フレデリックを含む二六〇人がアトランティック号(the Atlantic)でフィラデルフィアに到着し、更に別の一団がマルガレッタ号(the Margareta)で到着したことになる。^④また、「一説では以上の三隻で到着したのは合計一二五家族になっている。^⑤ラップを慕って新大陸に上陸した信者の正確な数は不明である。ウィルソンの最近の研究でも、第一団三三〇人、第二団二六九人、第三団七〇人としているが、最後の七〇人のうち大部分は、ラップ神父とともに前年到着していた、もう一人のセパラティスト(Frederick Conrad Haller)に従って、他の定住地に向かってしていると述べているため確定数を把握することはできないが、^⑥ほぼ六〇〇人に近

い数であったと思われる。

もっとも全員が直ちに開拓地に入ったのではなく、「ラップと腕スキの職人が全員を収容するための小屋づくりに専念した間、大多数の仲間は、メリーランドとペンシルヴァニアの各地の個人農場で賃労働に従事していた」^⑦のであり、家族ぐるみで前借した渡航費の返済のために働いた者も少くなかった筈である。

この点について、ウィルソンは、ラップ神父に従って先遣隊として開拓地に直ちに入ったのは、フレデリックを含めて八〇人、残りは東部に留まったが、その間、すでに新大陸に移住していた多くのドイツ人から、必要な衣食住の供給を受けたこと、フィラデルフィアのドイツ社会が、彼らの定住地への出発に際しては二〇〇ドルの餞別をおつめて贈っていることを明らかにしている。^⑧

一八〇五年二月十五日、受け入れ準備の整った開拓地に集合した信者は正式に共同体 (Community) を組織し、村の名称をハーモニイ (Harmony, Harmonie) と定め、次の「契約」を定めた。

「(1) すべての加盟員が所持する現金、土地、家財の一切は、この共同村の利益のために寄附され、その使途については管理者 (the superintendents) の自由裁量に委ねられる。加盟員は共同村の規則を遵守し、管理者の命令に服従し、村の幸福と子供達の幸福のために誠実に労働することを誓う。

(2) ジョージ・ラップとその側近 (the associates) は、個々の加盟員の現世の福祉と永遠の至福 (temporal welfare and eternal felicity) のために必要な世俗的、宗教的教育を実施する。加盟員のすべて

ロバート・オウエンとニユー・ハーモニイ (1)

に生活必需物資を支給する。寡婦や子供はもちろんすべての加盟員が病気のときも、その老後においても生活を保障する。

(3) 退村時には、村に提出した現金は無利子で返還される。現金や家財をもたずに加盟した者には、加盟中の業績により考慮された金額を退村時に贈与する。(但しこの項目は一八〇八年に廃止された)^⑨

ロックウッドがまとめたこの「契約」は、ラップとその側近 (実際には妻子ジョン及び養子フレデリック) を一方とし、すべての信者とその家族を他方とする契約の形式をとっている。つまりラップとその側近 || 管理者にすべてを投げ出して入村すれば、管理者が村民の物心両面の生活を保障するという約束になっている。

もちろんこの「契約」が生産手段と消費資料をふくむ一切の財産を共有し、「能力に応じて働き、必要に応じて与えられる」共產主義的相貌をそなえているからといって、かれらが厳密な意味での社会主義を志向したのではないことはいうまでもない。この「契約」は当時の社会秩序の事実的矛盾の思想的反映でもないし、キリスト教の原理に根ざす体制変革の思想でもない。つまり「契約」は近代的なキリスト教社会主義の体系を求めたものではない。敢ていうならこれは『聖書』(とくに「使徒行伝」) を根拠に、原始キリスト教団の共産生活を復活させて「永遠の至福」を願う信者の群れの郷愁である。

だが、「乏しい者はひとりもいなかった。地所や家屋を持っている人たちは、それを売り、売った物の代金をもって、使徒たち (apostles) の足もとに置いた。そしてそれぞれの必要に応じて、だれにでも分け与えられた」(使徒行伝、四・三三―三四) というようにはならなかつ

た。最も富裕な一〇家族ばかりが、この「契約」に満足せず加盟しなかったため「契約」に署名した者は、むしろ「乏しい者」ばかりだったのである。

ハーモニイ共同村が創設された一八〇五年の村の人口について、正確な数字は判明しない。『ハーモニイ概観』では、開村時の「契約」署名者を三九一名としているが、これは開祖ラップ死亡後の一九三六年の村の規則改正時の署名者数の誤りである。^⑫ わが国の研究もその点について考慮がはらわれたものがなく、北野大吉氏も、住谷悦治氏とともに、開村時の人口を六〇〇人としておられるが、両氏ともポドモア (Frank podmore) の『オウエン伝』に拠っておられるだけであり、^⑬ しかも肝心のポドモアはノルドフ (Charles Nordoff) のややあいまいな記録によっているのである。^⑭

ハーモニイ共同体の人口の変遷については、いまのところ正確な数字を示したものが発見されていないが、開村当時の人口が六〇〇〜七〇〇人、一八〇九〜一〇年頃が七〇〇〜八〇〇人、ウエルテンブルグより新しく移民一三〇人を迎え入れた一八一七年頃が、そのピークであるが、それでも一、〇〇〇人をこえなかったものと思われる。^⑮

勤勉・質朴な彼らは、第一年目の終りには早くも一五〇エーカーの土地を開拓し、丸木小屋五〇戸のほか、教会、納屋、製材所を建ててゐる。翌年 (一八〇六年) には、更に四〇〇エーカーの耕地をつくり (うちぶどう園四エーカーを含む)、皮なめし所のはかに蒸留所を建て、三〇〇ガロンのウイスキーを製造した。彼らはドイツ農民らしく、ぶどう酒は好んだが、ウイスキーは村内では消費されず、六〇〇ブッシ

ェルの余剰穀物とともに外部に売却され、必要な日用品の購入の資金にあてられたのであった。

共同の成果は、開村後数年の村に驚異的な繁栄をもたらすようになる。生産に関する一記録によれば、一八〇九年には、六千ブッシェルのトウモロコシ、四千ブッシェルの小麦、同量のライ麦、五千ブッシェルのオート麦、一万ブッシェルのジャガイモ、四千ポンドの亜麻と麻、その他の農産物を収獲している。

翌一八一〇年には村に羊毛工場が建設され耕地は二千エーカーに増えている。当時、村を訪れた一旅行者は次のように述べている。

「この小さな共和国が五年間につくり上げた農場や工場の目ざましい発展を目の当たりにして、われわれは驚嘆し、賞賛の念を抑えることができなかった。同数の家族が各地に散在して働くことすれば、五〇年にかかる仕事を、彼らは僅か五年で、しかも堅実に成し遂げたのだ。これはひとえに彼らの和合と友愛、そして不変不屈の努力によるものであり、村全体の利益と幸福のためという場合を除いて、彼らは自利心を知らないのである」^⑯。

村は活気に溢れていた。だが外部世界に通ずる交通手段に乏しく、生産物の出荷に重要な水運の便が無いこと、土壌が果物、とくにぶどうの栽培に適さないことを理由に、より温暖な土地を求めて移住を決意することになる。

一八一三年、信者の期待を荷ったラップ神父は、村民二人を伴って西部に旅立ち、オハイオ川流域の各地を探索の末、翌年、その支流ワバッシュ河 (Wabash R.) の河口から数マイル遡った地点を見出し

た。河の東岸に沿った平坦地は、必要な水量に恵まれ、家畜用の牧草も豊かであり、繁茂する森林からは、多種の良質の木材の伐り出しが可能であった。ラップはこの政府所有の未開拓地二万エーカーに、隣接する個人の開拓地を合わせて計二万五千エーカーの土地を購入する手筈を整えた。早くも六月には一〇〇人の先遣隊がこのインディアナの開拓地に入植し、新しい村の建設に着手したし、その間、村に残った六〇〇人は、フレデリックの監督の下で、全村移住の準備に努めたのであった。彼らは六千エーカーに拡大されていた耕地とハーモニ村の一切を一〇万ドルで、メノー派のジグラー(Abraham Ziegler)という男に売却しているが、一〇年間に建築し整備した住宅、教会、宿屋、店舗、倉庫などの建物だけで一二万ドルの価値はありとみられていたので、いわば捨値同様で売却して立ち去ったことになる。

一八一五年六月、新しい経営地に勢揃いした彼等はこの地を再び「ハーモニ」と名づけ、一致協力して村の繁栄をはかり、数年のうちに、アメリカで最も魅力的な村落を形成するようになる。ハーモニが成功をおさめた理由の第一にあげなければならぬのは、もちろんラップ神父の宗教的統率力であろうが、加えてその養子となったフレデリックの対外的手腕が、村の存立を支え、村民の独自の信仰の保持に大きく寄与したことを忘れてはならない。この点についてロックウッドは次のように述べている。

「ラップ神父は、この小さな国の王であったに對し、フレデリック・ラップは國務長官であつた。そして神父は國の内部を支配し、フレデリックは外交面を担当したのである。彼を通じてこの共產体

は外部世界との実業及び政治上の接觸を保つたのである。フレデリックは、インディアナが州に昇格するに際しての制憲議会のメンバーであつたし、後には有力な州會議員になっている。」^⑮ 若いラップの具体的な指導の下に、ハーモニストは荒野の田園都市を建設していった。

「この新しい定住地は河岸の広大な平地であり、ブドウ栽培に適した小高い丘を背負つて位置していた。肥沃な土壌は豊作を期待するに充分であつたから、彼らは忽ちに平地をとうもろこし畑と牧草地に作り変えたし、丘はすばらしい果樹園と見渡す限りのブドウ園に一変した。居住区の街路にははりえんじゅ(*locust-trees*)と桑の木をおいしげらせるようにした。——(後にこの桑の木が、村の産業として重要な絹織物の生産に大きく寄与するようになる) 定住者の住宅は煉瓦造り又は木造であつたが、一軒ごとに果樹を植え込んだ広い庭が四方を囲んでいた。——(この庭は村の火災予防のために広くとられ、かつ消費用の野菜が植えつけられた) その他、村にはラップ神父のための頑丈な煉瓦造りの家、インディアンや外敵の攻撃に備えて、周囲に銃眼をつくりめぐらせた石造の巨大な穀物倉庫、木造の教会及び、各先端に一つづつ計四つのドアのある十字状の大きな煉瓦造りの建物があり、いづれも村の集会所の役割りを果していた。村にはまた絹工場、羊毛工場、製材所、煉瓦製造所、蒸留酒製造所、製油所、及び染工場があり、ハーモニはやがてこの地方の重要な商業の中心地となつていった。」^⑯

村の生産物は、外部から仕入れた乾物、金物類、農機具などと共

に、村内に設けられた売店、近隣に設置された二カ所の支店を通じて広く販売された。とくに「ハーモニイ製」のレットルの付された小麦粉、羊毛製品、ウィスキーなどは品質の優秀さをもって知られ、「その取引先はニュー・オリンズにまでも及んでいた。」²⁰⁾

ハーモニイ製品の良さに関してロバート・オウエンは、「それはひとえにこの村を造り上げた人々の品性にもとづいている。私はいまだかつて、彼らほど親切で、穏和で、勤勉な人達に出逢ったことがないし、あらゆる取引の上で、ハーモニストほど誠実で、正直で、公正な人達を見たことがない。」²¹⁾と、賛辞を呈している。

勤勉な彼らは、第二のハーモニイに入植して僅か二年のうちに、ドイツの故郷から一三〇人の親類や知人をよびよせるに足るだけの財力を獲得しているし、一八一八年には、最初のハーモニイ結成当時に、各家族が村に寄附をした資産に関する一切の書類を焼却して、全員の平等と結束を固めている。

村の景観が整い、経営が安定しているにもかかわらず、一八二四年になって、彼らは再び移住を決意し、かねてより交際のあった近隣の英国人セツラー、リチャード・フラワー (Richard Flower, at Albion, Illinois) に、土地及び附随する不動産の売却方を依頼したのである。

ハーモニストが再び僅か一〇年で移住を決意したのは何故かについて、ポドモアは、「表向きの理由は、この土地が健康に適さないということであつたが、本当の理由は、この地に留まる限り、人々の生活はより快適になりすぎて、固い信仰と独身主義への誓いを忘れ兼ねない恐れが生ずるため、人々を常に移動させるべきであるとしたラップ

神父の方針に基づいたものと考えられる」と述べている。²²⁾

だが、ポドモアの推断は余りにも単純である。たとえば、シカゴのハル・ハウス (Hall House) の近辺で、更にロスアンゼルスで社会事業に従事しつつ、英米史、経済史の研究を深めていたハーベレイ (Rowland Hill Harvey, ?~1943) も、「ラップ神父がハーモニイを立ち去ったのはなぜなのかを断定することは困難である」と述べている。²³⁾

もっとも彼は、一八二四年の冬、ロバート・オウエンが始めてラップとピッツバーグで出逢った際に、「ハーモニイの気候は、イギリス人やアメリカ人には快適なものであろうが、ドイツ人には不適當であつた」²⁴⁾とラップが述べたことに注目して、「たしかに彼らがハーモニイに共同体を発足させた最初の年、一八一五年の死亡率は非常に高いものであつたが、ハーモニイ最終の年の死亡率は僅かに二人に過ぎなかつた」²⁵⁾として、結論的には彼もまた、デイル・オウエンや、ポドモアに同調して、信徒を常に開拓者の労働に専念せしめるためには移住すべきだとしたラップ神父の意志に重きを置いている。

だが、インディアナから再びペンシルヴァニアへの移住の理由について、従来の伝統的解釈に委ねたままで良いかについては疑問が残るし、この移住については、かなり複雑な動因が重複していたものとみられ、しかもこのことは、一八二五年以降、同じ舞台で展開される、ニュー・ハーモニイの活動を考える上で参考になると考えられるので、以下、その動因のいくつかをあげて考えてみよう。

① 村民の生活が豊かになるにつれて、そのモラルが低下することをラップ神父が危惧したこと。

ポドモア達の説明のとおり、これを移動の主因と考えることは容易である。たとえばロバート・デイル・オウエンは、その回想録の中に、次のように記している。

「彼らの実験は金銭上からみれば驚異的な成功を収めた。……彼らがこの国に移民してきたとき財産は一人当り二五ドルを越えることはなかった。だが二一年間に（つまり一八二五年には）それは男女、児童を問わずおしなべて、一人当り少なくとも二五ドルにはなっている。この額はその年のアメリカ合衆国の国民一人当りの富の一〇倍であり、その時点でインディアナでは一人当り一五〇ドル、マサチュセツでも三〇〇ドル以下であったのだ。」²⁶

ハーモニストの当初の資産を一人当り二五ドルとみたデイル・オウエンの計算の根拠を求めるのは容易である。前述のとおりラップは一八〇四年に最初のハーモニイの土地五千エーカーを、一エーカー当り三ドルで購入したとしている。つまり一万五千ドルの土地代金を村民数六〇〇人として除しただけのことである。²⁷だが一八二五年の資産一人当り二千ドルについては明確な裏付けがない。²⁸かりに当時の村の人口を七〇〇人とすれば、ハーモニイの資産は実に一四〇万ドルという巨額に達していたことになる。だが彼らの勤労の果実としてこの額が不当に過大なものではなからうことは、その後の経過からみても推察がつく。彼らは、一八二五年以降エコノミー (Ökonomie, Economy) と名づけた第三の定住地において繁栄を続けるのであるが、ウィリアムズによれば、「一八五二年、彼らの資産は優に百万ドルを越え、一万エーカー以上の土地を所有して、広く農工に従事していた」²⁹とあ

り、更にロックウッドは、一八六〇年代当初の彼らの富を「一千万ドルないし三千万ドル」³⁰と高く評価しているからである。

だが、デイル・オウエンが推論し、それを肯定したように、村の経営が安定し、村民の生活が程度をこえて安楽になれば、更に荒地を求めて移住して行くのが、ラップの方針とするならば、なぜに彼らは、再びペンシルヴァニアに逆戻りし、第一のハーモニイよりも更に交通の便利なビーバー郡のオハイオ河北岸に定住地を定めたのか？更にその後は村の消滅に至るまで、八〇年間再び移住することなくその地に留まったのはなぜか？の疑問が残る。

②村民が悪感 (おんかん) *aversion* とマラリヤ熱に悩まされたこと。

ノルドフの見聞記は、これを退村の理由の第一にあげ、ホロウェイもこれを踏襲している。³¹だが、ロックウッドは「ハーモニスト自身の証言では、熱病や悪感は一八二四年には殆んどみられなくなった」とも記録しており、またウィリアムズの説明では、「熱病や悪感の流行のおそれが再びみえた」³²ことを移住の理由の一つにあげている。何れにせよ、ハーモニストがこの地に移住した当初、マラリヤによる死者を多数出したことは事実であり、彼らの伝染病への恐れが、動因の一つになったことは充分考えられる。もっとも、オウエン主義者の入村後は、マラリヤ病患者が発生したという記録はない。

③周辺の植民者の敵意・妨害があったこと。

「周辺の住民は大部分が南部諸州からの植民者で、良い性格の持主ではなかった。彼らの多くは、無知で、意地悪で、騒々しく、何ごと

た」とウイリアムズが述べている。彼らの移住の理由の一つとなったことは、ニュー・ハーモニーの短い歴史を考える上でも記憶しておかねばならないことである。

④村の工場施設は整ったが、製品の販売拡大が見込めず、農産物すら充分売れなくなったこと。

みておいたように、ハーモニーの生産施設は整備され、地方の商工業の中心地となっていた。だが近隣のハーモニー製品に対する需要の拡大は望めず、製品の販路の拡大に当たっても種々の制約があった。村の工業化の推進役であったフレデリックは、州会議員として、外国製品に対する関税率の引き上げと、国産品の愛用を求めて、連邦下院に陳情したりしているが、成功せず、羊毛製品の製造を中止し穀物とブドウ酒の増産に力を入れたものの、当時の全国的不況の中で、とりわけ大消費地への輸送の不便さが災いして、品質を誇りながらも、大量の農産物の効果的売却に必ずしも成功しなかったのが、一八二〇年代に入ってから状況であったと思われる。

もっとも当時、村はすでに裕福であったことは①の説明からも考えられるが、とくに現金量については、一八二三年に、彼らがインディアナ州に六^④の利息で資金を貸付ける意志のあることを表明していた点からみて、かなりの蓄積があったものと思える。だが村から州への貸付は実際には行われなかったようであり、『ハーモニー概観』では、当時の州紙幣 State paper currency の価値の下落を、ペンシルヴァニア州への移住の原因の一つに数えている。^⑤

このように詮索してみると、モラルの低下とか、気候の不順などの

ラップ神父の危惧は移住に当たっての表向きの理由であって、実際には、むしろ村のより一層の繁栄を期待したフレデリックの企図が支配的であったように思える。村の實際生活の指導者であった彼は、涉外、経営面で秀れた業績をあげただけでなく、進取の気象に富んでいた。たとえば『ハーモニー概観』によれば、――

「彼はハーモニー社会の単なる一員ではなく、極めて創造的な能力を発揮した。村内で、石油を照明用に利用した最初の人物は彼である。第二に彼は蚕を飼ひ絹（織物）をつくる仕事を始めた。第三に、蒸気機関を据え付け、その蒸気を工場の暖房や洗濯所に利用した。第四に、村内で印刷機械を組み立てている。第五に、円形のガラス板が回転する静電気放電装置を製作して、リューマチの治療を試みている。その他にも知られない発明、実験は多いものとみられ……壮年時代の彼がみせた独創的先導力は、当時のアメリカの他の共産体ではみられなかったものである。」^⑥

といわれるほどの人材であり、第三の、そして最後の定住地には、「エコノミー」という名称が付され、当初購入した土地は、三千エーカーである。彼の設計のもとに一八三二年になって完成した村のたまたまずまいは、農業規模を縮小して、村の生産の基礎を、製造工業に移し、大消費地ピッツバーグを意識した産業都市のおもむきを備えたものになっており、盛んに機械を導入し、絹織物、綿製品から家具製作など工業化をはかったのは村の人口減少に伴った経営方針の変更でもあるが、遂にはピッツバーグ、シカゴへの幹線鉄道と連結する私有鉄道を敷設したり、原料木材確保のためワールレン郡 (Warren County)

に六千エーカーの森林を購入するなど、その後のエコノミーはさらに繁栄を続け、ともかくにも二〇世紀の初頭まで存続したことは確かである。ハーモニイを立ち去って後のラップ派のその後の歴史は、本稿の主題とは直接関連しない。だが、彼らはニュー・ハーモニイの没落後も、旧村に思いをはせ続け、一八七四年には、現在もなお「勤労者会館」(Workingmen's Institute)としてかの地に存続している建物の建設費として二千ドルを寄附していることを特記しておこう。^⑬

① The Harmony Society in penn'a, p.7

② ホドキンズは土地は三千エーカーと述ぐ、『ハーモニイ概観』は、「約三千エーカー、一エーカー当り二ドル」と述べているが、この点で三つ、一八〇六年ラップが時の大統領ジェファソンにあてた嘆願書(Wilson, op. cit., Appendix A, pp. 217-220)を検索したウイルソンが、「四、五〇〇エーカー、一エーカー当り二、五ドル」と訂正していることは正しく思ふ。

③ The Harmony Society in Penn'a, p.7

④ Ibid., pp.7-8

⑤ Lockwood, op. cit., p.11

⑥ Wilson, op. cit., pp. 13-14.

⑦ Mark Holloway, Heavens on Earth, Utopian Communities in America, 1680-1880, 1966, p.89

⑧ Wilson, op. cit., p.14

⑨ Lockwood, op. cit., p.12

⑩ William, op. cit., p.50

⑪ Harmony Society, op. cit., p.9

⑫ c.f., William, op. cit., p.91

⑬ 北野大吉『前掲書』二六二ページ

ロバート・オウエンとニュー・ハーモニイ (1)

住谷悦治『前掲書』九二ページ

⑭ Podmore, op. cit., p.

⑮ Charles Nordhoff, The Communitistic Societies of the United States.

⑯ William は「村は約一二五家族」ではじめられたといふ(p.29)同じく、

⑰ Lockwood は「三隻の船でアメリカに渡って来たラップの信者は一二五家族」といふ(p.11)、『ハーモニイ概観』は、「(契約)署名者三九一人とその子供達が村を創設した」といふ(p.9) Holloway は「約七五〇人の男女と子供が村を組織した」といふ(p.89)。またHillquit は「ラップの信者約六〇〇人が渡ってきた」(Morris Hillquit, History of Socialism in the United States, 1910 [Reprinted by Dover in 1971] p.32.)といふ。

⑱ Lockwood, op. cit., p.13.

⑲ Ibid., p.25

⑳ Podmore, op.286-287.

Podmore は村の生産施設として、「絹工場、羊毛工場、製材所、煉瓦製造所、蒸留酒製造所、製油所及び染工場」をあげているが、『ハーモニイ概観』では、「一八二〇年までに、「三階建の水力の製粉所、大きな製綿兼羊毛工場、製材所二カ所、製麻兼製油所、穀物倉二カ所、煉瓦と石で造った物品倉庫」計八カ所が建設されたと述べている。cf. Harmony Society in Penn'a, pp.18-19.

㉑ Williams, op. cit., p.63.

㉒ Lockwood, op. cit., p.27.

㉓ Podmore, op. cit., p.287.

㉔ Roland Hill Harvey, Robert Owen, Social Idealist, 1949, p. 99.

㉕ Ibid., p.96.

㉖ Ibid., p.99.

㉗ Rebert Dale Owen, Threading My Way, An Autobiography, 1874., p.240.

②7 あらためて註②を参照のこと。

②8 Robert Dale Owen, *Threading My Way, An Autobiography* が刊行されたのは、一八七四年であるが、その後一八九〇年に発行された *Historical Monograph No.1, of the University Iowa* によれば、ハーモニスト一人当りの富はアメリカに到着後二〇年にして、インディアナ州民一人当りの一三倍、マサチューセッツ州民一人当りの七倍に達したと記録してあるところからみて、「一人当り二千ドルの富」は必ずしもデイル・オウエンの誇張とは思えない。(cf. Lockwood, cit. p. 39.) また、Rowland Hill Harvey は「彼らが、平底船に重き金箱(複数)を積んで、ハーモニイを立ち去ったことは近郊の語り草となっていた」^{②9}と述べている (Harvey, op. cit., p. 98).

②9 Williams, op. cit., p. 21.

③0 Lockwood, op. cit., p. 34.

③1 Holloway, op. cit., p. 91.

③2 Lockwood, op. cit., p. 31.

③3 Williams, op. cit., p. 63.

③4 The Harmony Society in penn'a, p. 19.

③5 Ibid., p. 17.

③6 Ibid., p. 32.

③7 Lockwood, op. cit., p. 36.

五 オウエンの出発

ジョージ・ラップとハーモニストが、再びペンシルヴァニアへの移住を決意し、かねてからの知己であったリチャード・フラワーにハーモニイの一切の売却方を依頼したことはすでに前節で述べておいた。この点について一九六四年にニュー・ハーモニイを訪問された越村信三郎氏は次のように述べられる。

「この村が経済的に富み栄えるとともに、だんだんと怠惰の気風が現われてきて、開拓時代にみられたような緊張感が薄くなり、ラップの統制がきかなくなってきた。またこの村が市場から遠く離れていて、販路の拡大に不便なこともフレデリックの悩みの種であった。そこでラップとフレデリックはさらに他の場所に移ることを決め、一八二四年四月十一日、不動産売買業者リチャード・フラワーに委任して、その財産を村ごと売りに出したのである。

当時の財産目録には、二〇、〇〇〇エーカーの上等開墾地、果樹一、五〇〇本、住宅四〇軒、丸太小屋八六軒、工場五棟、商店一軒、宿屋一軒等、ラップ派の一〇年間に流した汗の結晶が集約されている。

フラワーはわざわざスコットランドまで出かけていって、この商談を知人であったロバート・オウエンに持ち込んだのである。^①

また、一九六九年に同地を訪問された五島茂氏は次のように述べておられる。

「一〇年経ち、制欲的信者、とくに独身主義の流行によって、信仰とドイツ人的力行の村民の製品が、ニューオルリンズまで販路をひろげるに至るとともに、さらに東への販路の拡大のためと、村の経済的繁栄はかえって村民の動揺を生むと見て、指導者フアーザー・ラップは東帰を考えて第三次の村を再びペンシルバニアのピッツバーグ近郊のオハイオ河畔に三〇〇〇エーカーを購入して一八二四年から移住開始。四月イリノイ州の不動産売買業者ジョージ・フラワーに委任、全村を売りに出した。その広告（ドン・ブレイア『ニュー・ハアモニーものがたり』四版一九六七年、三二〜二ページ。なお越村信三郎「アメリカにおけるキリスト教共同村ニュー・ハアモニー物語のひとつ」『関東学院大学経済学会研究論集経済系』六一号昭和三十九年七月は同上書三版によるが、ラップにかんする詳しい紹介である）をもって渡英したフラワーは同年ニウ・ラナアックにオウエンを訪れ、セールスマンとしてその広告を示した。

ハアモニーの町。一級の土地二万エーカー付き。大ウオバッシュ河の東岸に位置し、その河口から水路七〇マイル。オハイオ河から陸路わずかに一五マイル。ウオバッシュ河は四季を通じ、二〇トン積みの船舶航行可能、中型蒸気船は一年の大部分。二〇〇〇エーカーのよく開墾された土地。そのうち一五エーカーは葡萄畑。三五エーカーはリンゴ果樹園。果樹と植木の多い快適な庭園。三階建の水力利用製粉工場一棟。広大な綿織物毛織物工場一棟。製材所二棟。れんがと石造りの大倉庫一棟。大穀物倉庫二棟。商店一戸。大きな宿屋一戸。作業場として使える木造建物六棟。五〇

ロバート・オウエンとニュー・ハアモニー (1)

の液槽^{ビット}をそなえたなめし皮工場一棟。脱穀機一台つき面積五〇×一〇〇〇の木造納屋三棟。大きい羊小屋三棟。二階建れんが造り面積六〇×六〇の住宅六棟。二階れんが造りおよび木造の住宅四〇戸。丸太小屋住宅八六戸。すべての家々は馬小屋と庭をもつ。大蒸留所二棟。醸造所一棟。〃（ほぼ越村訳）

これらのラップの財産目録がそのままやがてオウエンのニウ・ハアモイの村設備の全容となるので掲げておく。但しこの居住にとって重大な弱点である「自然」の苛烈さが故意に隠されていることに注意したい。^②

五島、越村両博士の以上の説明からも、ハアモニストの第三次移住の諸原因について、前節で考えておいたことが、必ずしも私の独断ではないことが裏付けされたわけであるが、問題となるのは、ラップの委任を受けてハアモニーを購入するようにオウエンにすすめた人物を、越村氏はリチャード・フラワーとし、五島氏は、ジョージ・フラワーとされ、両氏ともそれぞれフラワーを単なる「不動産売買業者」とみておられる点である。もっとも此の点に関しては従来のわが国のオウエン研究者は殆んど注意をはらわなかったといって良く、ハアモニー売買の仲介に当たったのは、単に一英人、またはフラワーという英人ということですまされている。^③

さて、一八二四年の夏に、ニュー・ラナーク郊外のオウエン邸（Braxfield）を訪れ、ハアモニー購入の相談をもちかけた人物がリチャード・フラワー（Richard Flower）であることは、デイル・オウエンやポドモアの述べるところである。^④

デイル・オウエンによれば、彼は「ひとかどの資産をもつ経験豊富な英国人農業経営者で、かなり前にアメリカに渡り、ハーモニイから約二五マイル離れたイリノイの南東部アルビオン (Albion) に定住している人」^⑤であり、ロックウッドは、「彼は一八一八年に、イリノイ州、エドワード郡 (Edward County) の二万エーカーの土地に、英国人セツルメントを開設した人で、彼とその仲間はラップ派と商取引の上でも親しく、ハーモニイをしばしば訪問していた。」と述べている。また、マーガレット・コールは、彼は「急進的なジャーナリストで、アメリカに渡り、自ら共同体 (Community) を創設した英国人」^⑦であると述べている。

ところでアメリカ合衆国の二一番目の州として、イリノイ州が発足した一八一八年に、エドワード郡の郡都アルビオンにうまれた、この英国人コロニーは、その後州内に設けられたフォックス・リバーのクウェーカー村 (a Quaker group on the Fox River, 1835) やヌーボー・モルモン開拓地 (a Mormon Settlement at Nauvoo, 1839) 、ピンヨップ・ヒルのスウェーデン人共同体 (a Swedish communal colony at Bishop Hill, 1846) などと並んで、アメリカ西部開拓史上著名なものであるが、二万エーカーのこのコロニーの創設者がリチャードであると断定できない点ものこされている。たとえば、『インディアナのハーモニイ訪問記』を書いたヘバート (William Hebert) は、このコロニーの創設者をバークベック (Morris Birkbeck) 及びジョージであるとし、それは単なる移民のコロニーであって、ラップ派やオウエン主義者の共同体主義 (Communitarianism) にもとづく実験とは基本的に異なること

を強調している。^⑧

またハーベエイは、ジョージが創設者の一人であるといい、ラップの委任を受けてオウエンに逢いに出かけたのもジョージであるといっている。^⑨また、さきにも見ておいたロックウッドも、同じ著書の中で、「ジョージ・フラワーはエドワード郡の英国人セツルメントの創設者の一人である。」^⑩ともいっている。

かように従来の研究書の中で、二人のフラワーが微妙な混同をみせている以上、ハーモニイ購入の件をオウエンにもちかけた人物をジョージ・フラワーとされる五島氏の説明を軽率な誤謬とのみ断定するわけにはいかないであろうが、ベスターの説明では、リチャードはジョージの父親であり、^⑪ラップ派が彼に斡旋を依頼したことになる。

「一八二四年五月二日、ハーモニイの全員が村の財産処分をフレデリックに一任する旨の委任状に署名した。六月二五日にはフィラデルフィアの新聞に売却広告が出された。ほぼ同時期にラップ派は近くのリチャード・フラワーに、英国で買手を探すように依頼している。フラワーは一八二四年八月の中頃 (八月十四日) に、ニューラナアークのオウエンを訪ねている。」^⑫

以上がベスターの周到な説明であるが、リチャードの英国行きは、単にハーモニイの買手探しを主目的としたのではないことに注目しておいた方が良いと思われる。

一八一八年イリノイ州が成立したが、州憲法は奴隷制を認めている。だが州内北部では奴隷廃止運動が強く、反対に南部では奴隷制は

認の声が強かった。リチャードは奴隸制即時廃止論者の急先鋒であり、一八二四年には彼らの活動が成功して奴隸制を合憲とした州憲法は修正されることになった。もちろんこの州が黒人に参政権を認めるようになったのは、さらに遅れて一八七〇年のことであり、一八三七年には、同州のアルトンで、奴隸制反対の宗教紙（Observer）を発行していたラブジョイ師（Elijah P. Lovejoy）が南部の暴徒に射殺され、印刷機が破壊されるといった奴隸解放史上有名な事件がおきているなどの事実が示すように、その後も奴隸制擁護派の勢力は強硬であった。一八二四年の州憲法修正当時、彼らから一八歳になる息子のエドワード（Edward）を暗殺すると脅迫されていたリチャードは、末の息子の安全を確保するために英国に避難させることにした。

したがってこの息子連れて、英国に帰ることになったリチャードに対して、ハーモニイの購入者を英国でみつてくれるならば、五千ドルの手数料を出そうと、ラップが依頼したというのが真相のようである。^⑮

また文献を綜合すれば、イリノイの英国人セツルメントは、リチャード・フラワー及びジョージ・フラワーの父子が、パークベックの援助を受けて創設したものとみるのが無難であり、リチャードの年長の息子ジョージは、父に劣らぬ積極的な奴隸廃止論者であり、実際の活動家であった。彼が、共同体主義者（Communitarian）であり、一八一九年頃からハーモニイのような共同体のプランを黒人解放に役立てようと考えていたこと、事実、ニュー・ハーモニイの崩壊後は、オウエン父子や、フランシス・ライト（Francis Wright）と協力して、南

部に黒人解放奴隸のための小さな共同体（Naahota）を建設したことについては、ベスターやハリソン達の述べるとおりである。^⑯

したがって、フラワー父子を、単に「不動産売買業者」とされる五島・越村両博士の理解は十分でなく、渡米前後のオウエン父子は、ハーモニイ購入の経緯を通じてアメリカのコロニーや共同体の歴史や、奴隸問題についての有益な情報をフラワー父子から受けとったものと考えられるし、事実、オウエンの二人の息子の記録はそれを裏書きしているといえる。^⑰

* * *

リチャード・フラワーは、自由で、豊かな新しい国のフロンティアの生活の楽しさについて相当な誇張を交えてオウエン父子に語ったことと考える。「私はフラワー氏の語るフロンティアの生活ぶりを聞いて有頂点になった。そして或る朝、父が、『さあ、ロバアート、お前はどちらをとる？ニュー・ラナークかそれともハーモニイか？』と問いかけた時、私は即座にハーモニイ』と答えた」と述べたデイル・オウエンは、同時に、オウエンが簡単に商談にのつたのに驚感したリチャードが、「あなたのお父さんは、こんなに素晴らしい所を棄てて、奥深い西部の未開の地へ家族を連れて行こうと本当に考えておられるのでしょうか？」と問いかけたとも述べている。

オウエンは、「その実業生活を通じて、たとえ巨額の資金を必要とする場合でも、臆することなく即決主義をとり、幾度も好結果をおさめてきた、従って、ハーモニイの購入の際の彼の態度も、とりたてて急いでいたとはいえない」というマーガレット・コールの指摘はある

ものの、フラワールのニュー・ラナーク訪問から、僅か二週間後には彼はロンドンでアメリカへの出立の準備を始めており、現地ハーモニーにおける正式な売買契約の締結にいたるまでの一四〇日間のオウエンの足取りは、次のとおり多忙をきめめている。

一八二四年八月十四日 Braxfield の私邸で Richard Flower に対し

Harmony 購入の意志を表明する。

九月初旬 アメリカに出発の途次、ロンドンに現れる。

〳十日 ロンドン滞在中の William Maculture が、ア

メリカの Mme Pretageot に対し、「オ

ウエンがその実験の地をアメリカに選び、

Wabash の Harmonist の土地を購入する

ことを決めた」と書き送っている。

〳二一日および二九日、London Times がオウエンのアメリカ行きについて詳細に報道する。

十月二日 Liverpool を出帆、次男 William および、オ

ウエンの信奉者 Captain Macdonald 同行。

十一月四日 オウエン一行 New York に上陸

一週間後、蒸気船にて Albany に向ふ。

途中 Niskeyuna の Shaker 村を、四〳

五時間訪問。

〳十六日 Albany より New York に帰る。

〳十八日 New York を出発。

〳十九日 Philadelphia 滞在。

〳二五日 Washington に到着。

〳二六日 国務長官 Jhon Quincy Adams と会見。

〳二七日 大統領 James Monroe 訪問、インディアン

Choctaw 及び Chickasaw の酋長と出合

う。

〳二八日 Washington 出発、西部に向かう。

十二月三日〜六日 Pittsburg 滞在中。その間 Ohio 河を下

り、Economy に George Rapp を訪問、

Harmony の購入を申し込む。

〳十六日午後 Harmony に到着。Frederick Rapp に迎

えられ以後八日間、村内の実情調査。

〳二四日夕 Richard Flower と相談のため Albion に向

けて出立。Frederick も同行。

一八二五年一月一日夕 Albion より Harmony に帰還。

〳二日夜 次男 William に対し Harmony 購入の決心

を語る。

〳三日午前 売買契約書署名。

午後 William 及び Macdonald に後事を

託して再び東部に出発。(四月十三日、Har-

mony に帰着。⑦)

しかし、当のオウエンにとっては、アメリカへの旅立ちはなんら疑う余地のない予定の行動であり、彼が意識しなかったにもせよ、アメリカは、神の導きの地、であったのである。(未完)

- ① 越村信三郎「ロバート・オウエンの夢と現実—ニュー・ハーゼニー物語のふたつあり」『ロバート・オウエン論集—ロバート・オウエン生誕二百周年記念—』(ロバート・オウエン協会編) 昭和四十六年、一〇六ページ。
五島茂『ロバート・オウエン』(家の光協会) 昭和四十八年、二二二～二三ページ。
- ② たとえば、宮瀬睦夫『ロバート・オウエン—人と思想—』(昭和三十七年)では「「英人」になつておの(「二三ページ」)「北野大吉『ロバート・オウエン』(昭和二年)では「英人ローマン」になつておの(「二六三ページ」)「社会短史『ローマン社会主義』(昭和三年)では「ヘギルスマンローマン人」になつておの(「二七ページ」)。
- ③ Frank Podmore, op. cit, p.288.
- ④ Robert Dale Owen, op. cit., p.239.
- ⑤ Ibid.
- ⑥ George B. Lockwood, op. cit, p.30.
- ⑦ Margaret Cole, Robert Owen of New Lanark, 1953, p.146.
- ⑧ William Hebert, A Visit to the Colony of Harmony in Indiana (London, 1825), as reprinted in Harlow Lindly, ed., Indiana As Seen by Early Travelers (Indiana Historical Collections [III];

- Indianapolis, (1916) pp. 339-40.
- Arthur Bestor, Backwoods Utopias, The Sectarian Origins and the Owenite Phase of Communitarian Socialism in America, 1663-1829 (Second Enlarged Edition, 1970) p.49. ここで本書を本文中で『図説のローマン』と綴つた。
- ⑨ Roland Hill Harvey, Robert Owen, Social Idealist, 1949, p. 98, p.92.
- ⑩ George B. Lockwood, op. cit., p. 17.
- ⑪ Arthur Bestor, op. cit., p. 49n.
- ⑫ Ibid, p.101 and p.103.
- ⑬ c. f., George B. Lockwood. op. cit., p.30
- ⑭ Arthur Bestor, op. cit, p.219-221.
- ⑮ J.F.C. Harrison, op. cit., p.50n, and p.177.
- ⑯ Robert Dale Owen, Threading My Way (1874)
- ⑰ William Owen, Diary……from November 10. 1824, to April 20 [actually 19], 1825, ed. by. Joel W. Hiatt (Indiana Historical Society Publication, Vol. IV, No. 1: Indianapolis, 1906)
- ⑱ Robert Dale Owen, op. cit., p.241.
- ⑲ 241-242 Arthur Bestor, op. cit., p.p. 103-110 2-46°

